志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(28)

農用地総合整備事業大隅中央区域に伴う発掘調査報告書

宮脇遺跡

2001年3月

鹿児島県曽於郡志布志町教育委員会

序　文

本町は埋蔵文化財包蔵地が多く,「縄文銀座」と称される通り,縄文時代の遺跡を中心に前川,安楽川沿いに約200ヶ所の『周知の遺跡』があります。

これらの遺跡は,農業基盤整備事業あるいは宅地開発等の開発行為により,確認調査が実施され,貴重な資料を提供するとともに遺跡の性格が解明されつつあります。

本書は,志布志町安楽宮脇地内における農用地総合整備事業大隅中央区域に伴う,宮脇遺跡の発掘調査報告書であります。

宮脇遺跡では,攪乱土層中からではあるものの,古墳時代の土器を中心として,土師器・須恵器等が出土しました。

ここに,その調査結果を報告書として刊行いたしますが,この報告書が広く文化財保護並びに学術研究の一助となれば幸いです。

発刊にあたり指導者や作業協力者の皆様,また調査に御協力いただいた作業員の皆様,並びに関係各位に対し,厚く御礼申し上げます。

平成13年３月　　志布志町教育委員会

例　言

1. この報告書は志布志町による農用地総合整備事業大隅中央区域に伴う宮脇遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は，志布志町教育委員会が調査主体となり実施した。
3. 調査における実測および測量，写真撮影は，主に小村が行った。
4. 調査の実施にあたっては，鹿児島県教育庁文化財課の指導・教示を受けた。
5. 本書に用いたレベル数値は，すべて海抜高である。
6. 遺物番号については，通し番号とし，挿図，図版とも一致している。
7. 出土遺物は志布志町教育委員会で一括保管し，公開展示する予定である。
8. 本書の執筆および編集は小村が行った。

報告書抄録

ふりがな	みやわき　いせき					
書名	宮脇遺跡					
副書名	農用地総合整備事業大隅中央区域に伴う発掘調査報告書					
巻次						
シリーズ名	志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ番号	第28集					
編著者名	小村美義					
編集機関	志布志町教育委員会					
所在地	〒899－7192　鹿児島県曽於郡志布志町志布志二丁目1番1号 0994-72-1111					
発行年月日	平成13(2001)年3月31日					
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
みやわきいせき 宮脇遺跡	かごしま 鹿児島県 そお 曽於郡 しぶし 志布志町 あんらくみやわき 安楽宮脇	68	114	平成12年 1月13日～ 3月10日	588㎡	農用地総合 整備事業大 隅中央区域

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮脇遺跡	散布地 散布地	縄文中～晩期 古　墳～平安	竪穴状遺構	市来式土器ほか 成川式土器 土師器・須恵器	

本　文　目　次

序文
例言
報告書抄録
目次

第　Ⅰ　章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至るまでの経過 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
　第３節　調査の経過 …… 2

第　Ⅱ　章　遺跡の環境 …… 5

第　Ⅲ　章　発掘調査 …… 9
　第１節　基本土層 …… 9
　第２節　調査の概要 …… 9
　第３節　遺構 …… 15
　第４節　出土遺物 …… 18

第　Ⅳ　章　まとめにかえて …… 39

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡位置図 …… 6
第２図　遺跡位置図 …… 7
第３図　グリッド配置図 …… 8
第４図　土層柱状図 …… 9
第５図　Ａ地点土層断面図 …… 10
第６図　Ａ・Ｂ地点土層断面図 …… 11
第７図　遺物出土状況全体図 …… 12
第８図　遺構配置図及び遺物出土状況図 …… 13
第９図　竪穴状遺構（１・２号） …… 16
第10図　竪穴状遺構（３号） …… 17
第11図　確認調査平・断面実測図 …… 19
第12図　出土遺物実測図（１） …… 19
第13図　出土遺物実測図（２） …… 20
第14図　出土遺物実測図（３） …… 21
第15図　出土遺物実測図（４） …… 22

第16図　出土遺物実測図(5) …… 23
第17図　出土遺物実測図(6) …… 24
第18図　出土遺物実測図(7) …… 25
第19図　出土遺物実測図(8) …… 26
第20図　出土遺物実測図(9) …… 27
第21図　出土遺物実測図(10) …… 28
第22図　出土遺物実測図(11) …… 29
第23図　出土遺物実測図(12) …… 31
第24図　出土遺物実測図(13) …… 32
第25図　出土遺物実測図(14) …… 33
第26図　出土遺物実測図(15) …… 34
第27図　出土遺物実測図(16) …… 35

表　目　次

第1表　周辺遺跡一覧表 …… 6
第2表　出土遺物観察表 …… 36
第3表　出土遺物観察表 …… 37
第4表　出土遺物観察表 …… 38

図　版　目　次

図版1　調査風景 …… 41
図版2　遺物出土状況 …… 42
図版3　出土遺物(1) …… 43
図版4　出土遺物(2) …… 44
図版5　出土遺物(3) …… 45
図版6　出土遺物(4) …… 46
図版7　出土遺物(5) …… 47
図版8　出土遺物(6) …… 48
図版9　出土遺物(7) …… 49

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会文化財課（以下，県文化財課）では，県下の市町村教育委員会と連携し，文化財の保存・活用を図るため，各関係機関との間で，事業地区内における文化財の有無及びその取り扱いについて事前に協議し，諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき，農用地整備公団（大隅中央建設事務所）は，農用地総合整備事業大隅中央区域の計画策定にあたり，実施計画区域内の文化財の有無について，県文化財課に照会した。

分布調査の結果，当該事業区域内に宮脇遺跡が存在することが判明した。

これを受けて，県文化財課並びに大隅中央建設事務所と志布志町教育委員会の三者で協議した結果，事業実施前に遺跡の範囲・性格等を把握するための確認調査を平成10年８月に実施した。

確認調査の結果，実施計画地域内の新設道路部分の西側端に，宮脇遺跡が所在していることが明らかになった。

この結果を受けて，事業主体である緑資源公団（旧農用地整備公団）は，設計変更が不可能な旨を報告した上で，発掘調査の実施を要望した。

そこで志布志町教育委員会では，平成12年１月に遺跡の記録保存を主目的とする発掘調査を実施することとなった。

確認調査及び発掘調査は，志布志町教育委員会が主体となり，県文化財課及び県立埋蔵文化財センターの指導・助言を得て実施した。

第２節　調査の組織

１．確認調査（平成10年度）

調査主体者	志布志町教育委員会		
調査責任者	〃	教育長	早水秀久
調査調整	〃	社会教育課長	渡辺純幸
調査事務	〃	〃　係長	恒吉修二
	〃	主査	濱田優子
	〃	主査	小村美義
	〃	主事	坂元正知
	〃	主事補	下出克也
調査担当者	〃	主査	小村美義

２．発掘調査（平成11年度）

調査主体者	志布志町教育委員会		
調査責任者	〃	教育長	早水秀久
調査調整	〃	社会教育課長	渡辺純幸
調査事務	〃	〃　補佐兼	
		社会教育係長	山裾幸良

調査事務	志布志町教育委員会	主	査	濱田優子
	〃	主	査	小村美義
	〃	主	事	坂元正知
	〃	主	事	下出克也
調査担当者	〃	主	査	小村美義

第３節　調査の経過

１．確認調査（平成10年度）

確認調査は，平成10年８月17日から９月８日まで実施した。

遺跡の立地条件・現況地形等を考慮しながら，事業計画地区内の新設道路部分に合計９ヶ所のトレンチを設定して，確認調査を実施した。

確認調査の結果，第１トレンチから遺物が出土した。また，第６トレンチからは褐鉄鉱が検出された。

２．発掘調査（平成11年度）

発掘調査は，平成12年１月13日から３月10日まで実施した。また報告書作成作業については，年度を改めて平成12年10月５日から平成13年３月23日まで行った。

《発掘調査日誌抄》

【１月13日～１月14日】

発掘調査用具を現地搬入した後に，作業員への調査方法，調査上の留意点等を説明した。確認調査の結果を考慮しながら，遺跡の詳細把握のため，発掘調査区西側端（以下，Ａ地点）に，第１～第３の試掘トレンチを設定した。

また，海抜高をＡ地点に設定した上で，試掘トレンチのトレンチ位置及び遺物出土状況の平板実測作業に着手した。

【１月17日～１月21日】

第１～第３試掘トレンチの掘り下げを継続した。試掘トレンチの遺物出土状況を観察すると，第１，第２試掘トレンチでは，多量の遺物出土（いずれも攪乱層出土）が認められた。しかしながら，第３試掘トレンチでは，遺物出土が希薄であることが確認できた。

また，遺物出土状況及び出土土器の観察の結果，あらゆる時代の遺物が混在していることが判明した。試掘トレンチの掘り下げ及び遺物出土状況の平板実測が終了した。そこで，土層観察用の畦畔を残しながら，重機により工事計画の道路幅杭近くまで，表土剥ぎ作業を開始した。

【1月24日～1月28日】

重機により表土剥ぎを行うと，A地点の東側については，表土が厚く堆積している状況が認められた。しかしながら，試掘トレンチの結果と同様に西側に向かって，段々と薄くなっていく傾向がみられた。

表土剥ぎが終了後，東側から西側へ1～4，南側から北側へA・Bとし，1－A区，1－B区，2－A区，2－B区……と呼称するグリッドを設定した。

1－A・B区，2－A・B区の掘り下げを開始した。遺物出土が多量であったため，随時，平板実測を行いながら遺物取り上げも実施した。

【1月31日～2月4日】

3－A・B区，4－A・B区まで調査区を拡大して掘り下げた。調査区の1－A区，3－B区，4－B区には，遺物集中箇所が認められたため，調査範囲を一部拡張した。

また，遺物集中箇所については，竪穴住居跡の可能性もあるため，御池火山灰（以下，Ⅲ層）上面で遺構検出作業も着手した。さらに随時平板実測を行い，遺物取り上げも実施した。

【2月7日～2月10日】

1～4区について，アカホヤ火山灰（以下，Ⅴ層）上面で，遺構検出作業を実施した結果，合計3ヶ所に性格不明の竪穴状遺構を検出した。いずれの遺構も表面観察では，時代決定の要素となるべき火山灰を含まず，埋土上面から出土する遺物についても，一貫性は認められなかった。

これを鑑みて，遺物検出作業と同時進行という形で，これらの遺構についても，埋土の掘り下げを開始した。また，4区西側に試掘トレンチを設定し掘り下げた結果，遺物の出土が認められたため，5－A・B区を拡張設定し，掘り下げを実施した。

【2月14日～2月16日】

調査区を一部拡張した1－A区，3－B区，4－B区，5－A・B区及び縄文時代早期確認トレンチを設定し，掘り下げた。また，調査区東側（以下，B地点）には，第4，第5試掘トレンチを設定した。

1～4区の現況は平坦であったが，旧地形については，東側から西側への緩傾斜が看守されるとともに，北側から南側へも緩傾斜が認められるようである。

また，遺物については，攪乱されている耕作土・旧耕作土からは，遺物出土が認められた。しかしながら，Ⅲ層上位に落ち込み的な遺物の出土がみられる程度で，下位層についての遺物出土は皆無であった。

推測の域を脱し得ないが，昭和40年代における圃場整備事業等によって，旧地形が著しく変化しているようである。

【2月22日～2月25日】

B地点では，アカホヤ降灰以前については出土遺物が皆無であった確認調査の結果を考慮し，重機によって剥ぎ取りを行った。その後，褐鉄鉱検出を目的とした第6，第7試掘トレンチを設定し，下位層については，人力によって掘り下げた。

A地点においては，遺構検出作業を継続して実施するとともに，畦畔の土層断面線引き，実測作業を開始した。また，遺構内の埋土掘り下げも実施した。竪穴状遺構における埋土内の畦畔断面，

出土遺物を観察すると，その時期についても一貫性がなく，時期限定は困難であった。

竪穴住居跡としての可能性を高くするために，柱穴の検出についても詳細に行ったが，明確なものは今のところ存在しない状態である。竪穴状遺構の立地条件は，旧地形における比較的高い位置に立地しているようであり，調査区中央の小谷には位置していない。この小谷には硬化面は認められず，道として利用された可能性は薄いと考えられる。

縄文時代早期確認トレンチについては，遺物・遺構とも検出されなかった。

【２月28日～３月３日】

Ａ地点の１～５区，Ｂ地点の掘り下げがほぼ終了したため，Ａ・Ｂ地点について，旧石器時代の確認トレンチを設定し掘り下げた。また，遺構検出作業，土層断面実測を継続して実施し，旧地形の把握のため，等高線の間隔を50㎝とした地形図も作成した。竪穴状遺構が完堀したため，１ｍグリッドを設定して平面，断面実測を開始した。Ａ・Ｂ地点の畦畔，試掘トレンチの土層断面実測が完了した。

【３月６日～３月10日】

竪穴状遺構の実測作業を継続し，遺構内埋土の畦畔断面実測作業に着手するとともに，遺構周辺の柱穴確定作業を実施した。遺構検出作業については，最終検出をアカホヤ上面で実施したが，当時，雑木などが多数生えていたようであり，柱穴の検出作業には時間を要した。また，旧石器時代の確認トレンチについては，遺物・遺構とも検出されなかった。

全行程が終了したため，埋蔵文化財収蔵整理作業室に撤収した。

第 II 章　遺跡の環境

志布志町は鹿児島県の最東部に在し，大隅半島の東海岸に面する。北東から東にかけては，宮崎県都城市及び串間市に接し，県境をなしている。立地上，宮崎県との関係は深く，それは遺物の面からも看取できる。北部には山岳地帯を有し，海岸線へと向かう緩やかな丘陵地形をなす。丘陵の間には安楽川と前川の二大河川が貫流し，大小様々な独立した台地及び沖積地を形成しつつ，南面する志布志湾に流入している。

宮脇遺跡は，志布志町の西部に位置する安楽台地に所在する。台地上には日南山地を源流とする安楽川が流れ，シラス台地を刻む深い河谷を形成しながら志布志湾に流れ込んでいる。安楽川流域には遺跡が数多く存在し，台地上のみならず台地辺縁にも遺跡の所在が確認されている。台地周辺の沖積地にも遺跡の存在がみられ，遺跡の所在は広く安楽川流域に広がっていると捉えることができる。安楽川流域の縄文遺跡は，上・中・下流でそれぞれに特徴的な分布を示している。すなわち，上流域は縄文早期の遺跡が多く，中流域には早期と晩期の遺跡が多い。下流域には晩期の遺跡が圧倒的に多い。宮脇遺跡も，縄文後・晩期の遺跡として周知され，下流域の一端を構成している。

安楽川下流域の縄文遺跡で特徴的なものとしては，縄文後期を中心として早期の遺物も出土している中原遺跡，塞之神式土器を中心とした早・中期の大迫遺跡などが存在する。なお，安楽川下流域は台地，沖積地，海岸部から構成された縦長の地形を呈しており，縄文遺跡の所在地を考察し，遺跡の在り方を追求するにあたり，地理的好条件を有していると考えられる。先述したように縄文後期の遺跡は特に多く，曲瀬台地・上門台地に集中して存在している。宮脇遺跡を含む，これら縄文後期の遺跡では指宿式，出水式，市来式，草野式，御領式土器など各種の土器が確認されている。また，台地からやや離れた沖積地には，晩期の遺跡である安良遺跡や鳥井下遺跡が存在し，黒川式や大石系の土器が確認されている。

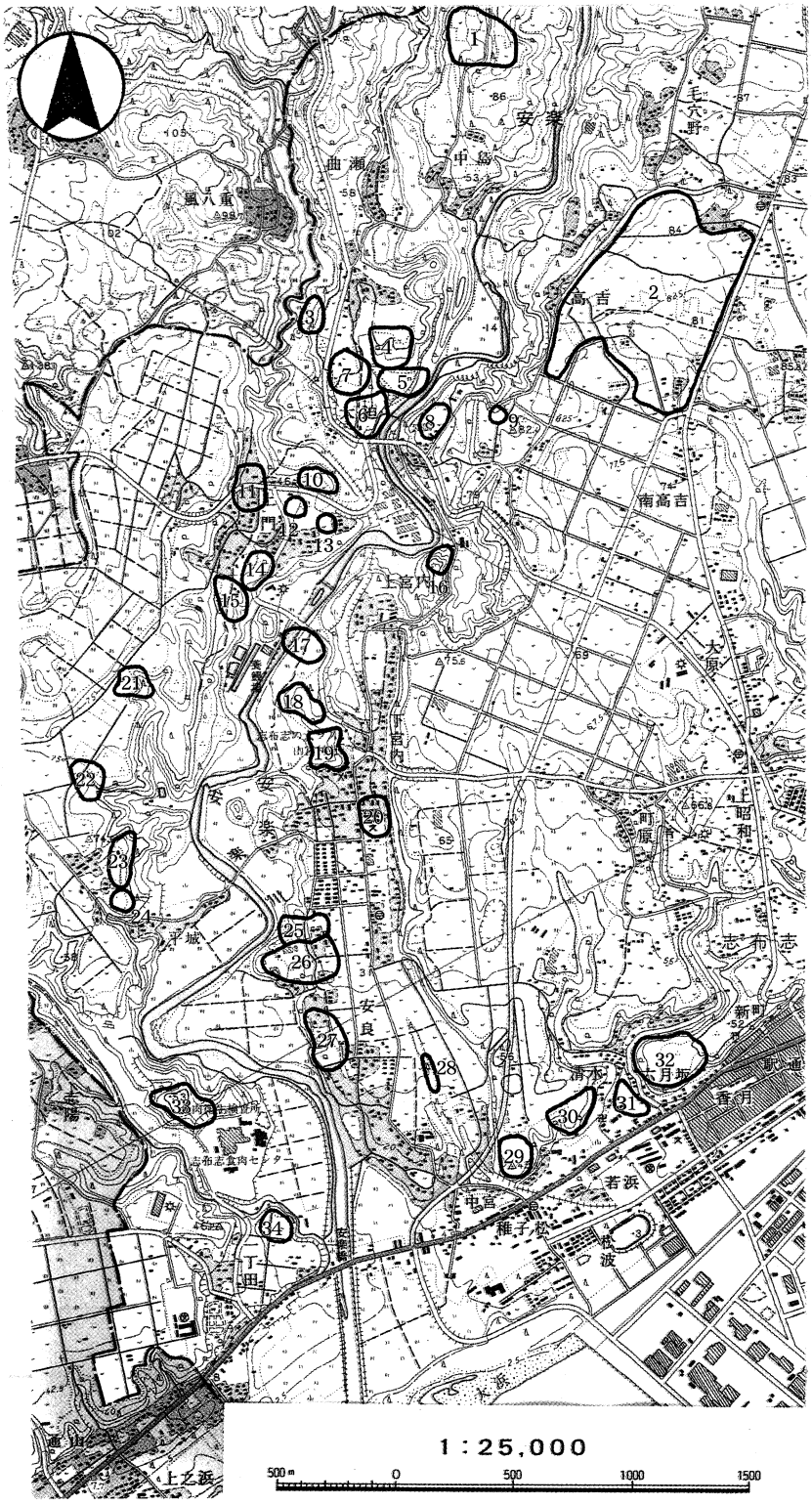
宮脇遺跡は従来，縄文後・晩期の遺跡として周知されていた。しかしながら今回の調査によって古墳時代の土器に比定され，南九州に特有の在地系土器である，いわゆる「成川式土器」の出土が確認された。

（参考文献）

瀬戸口望「志布志町の縄文遺跡の分布」『鹿児島考古』9　1974

志布志町教育委員会『志布志の埋蔵文化財』1985

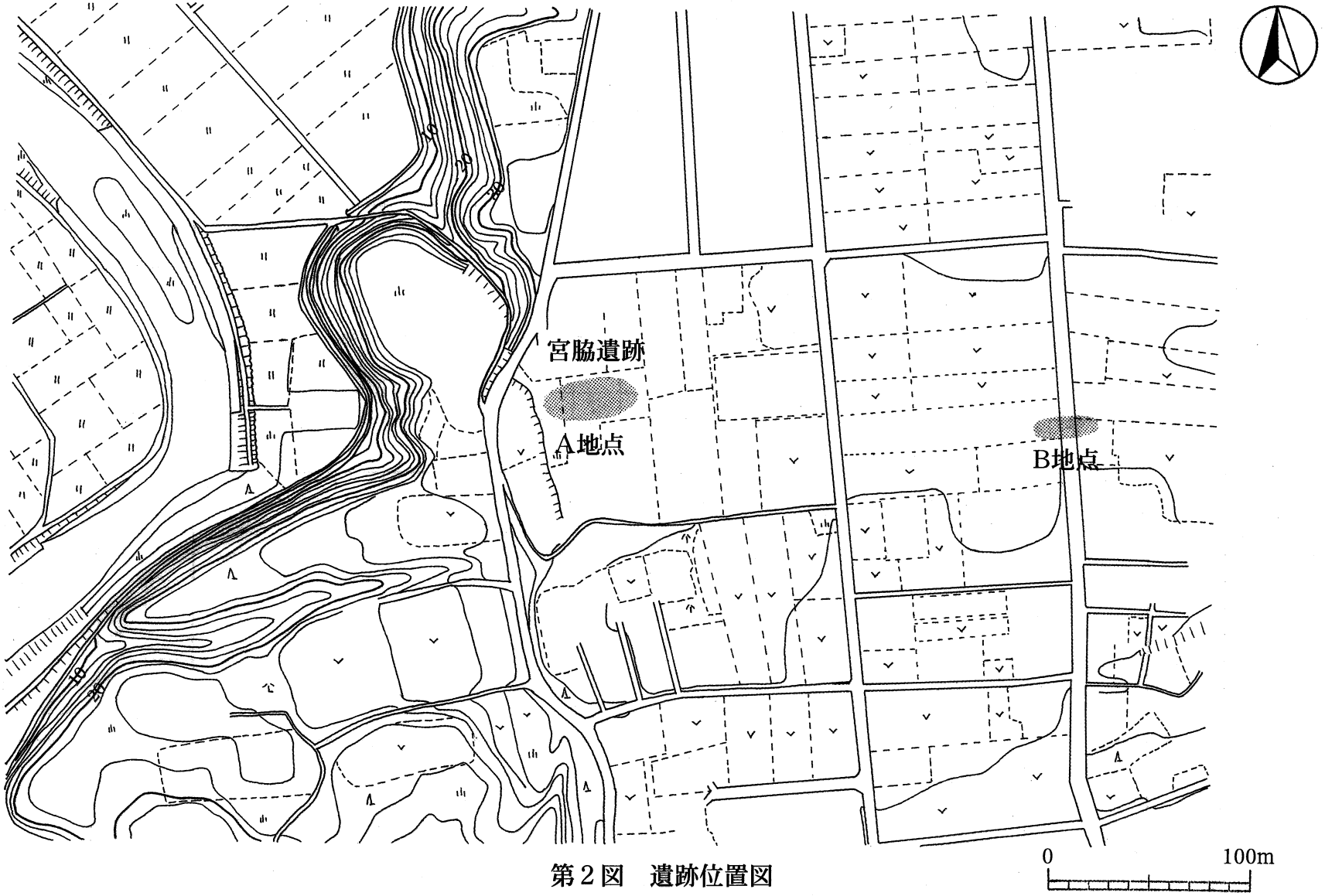
志布志町教育委員会『中原遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（9）　1985



第１図　周辺遺跡 位置図

1	柳	縄文・弥生
2	高吉Ｂ	弥生
3	飛渡	縄文
4	曲瀬	縄文・弥生
5	小瀬Ａ	縄文
6	小瀬Ｂ	縄文・弥生
7	中原	縄文・弥生
8	高吉Ａ	縄文
9	大迫	縄文
10	上門Ａ	縄文
11	上重	縄文・弥生
12	上門Ｄ	縄文
13	上門Ｂ	縄文
14	四反田	弥生
15	上門Ｃ	縄文
16	百堂穴	縄文
17	向江	
18	安楽城跡	鎌倉
19	山宮古墳	平安
20	宮之馬場	弥生
21	七本松	弥生
22	高牧	弥生
23	二重堀	弥生
24	平城	弥生
25	宮脇	縄文
26	頴娃郷	
27	安良	縄文
28	八ヶ代	古墳
29	別府	縄文・弥生
30	水ヶ迫	弥生
31	船磯	縄文
32	外堀	縄文
33	小牧１号墳	古墳
34	権現原	弥生

第１表 周辺遺跡 一覧表



第２図　遺跡位置図

第３図　グリッド配置図

第 III 章　発掘調査

第１節　基本土層

宮脇遺跡は，東向きの河岸段丘上に位置し，全体としては一見平坦な地形をしているように見えるが，小さな起伏が各所に認められるようである。大きな傾向としては，東側から西側に向けての緩傾斜が認められる。

Ⅰ層：耕作土・旧耕作土・盛土である。フカフカした軟質土が厚く堆積していたため，色調・硬さ等により，数層に細分できるところもある。灰白色の軽石を包含する。いわゆる攪乱層であり，一括資料が多量に認められた。

Ⅱ層：暗茶褐色軟質土。若干軟質な腐植土である。場所によっては認められず，Ｂ地点付近を中心として堆積している。

Ⅲ層：暗黒赤褐色土。ゴマシオ状の火山灰を包含する。『御池』に比定される。

Ⅳ層：黒褐色腐植土。軟質土である。下部に黄白色軽石を多量に含む場所（Ｂ地点）もあるが削平されたのか，場所によっては，認められない。『池田』に比定される。

Ⅴ層：暗黄橙色火山灰土。いわゆる『アカホヤ』である。場所によっては火山灰（ａ層）とパミス（ｂ層）に細分できるところもある。Ｂ地点ではｂ層より，褐鉄鉱（鉄分が酸化したもの）が多量に出土した。

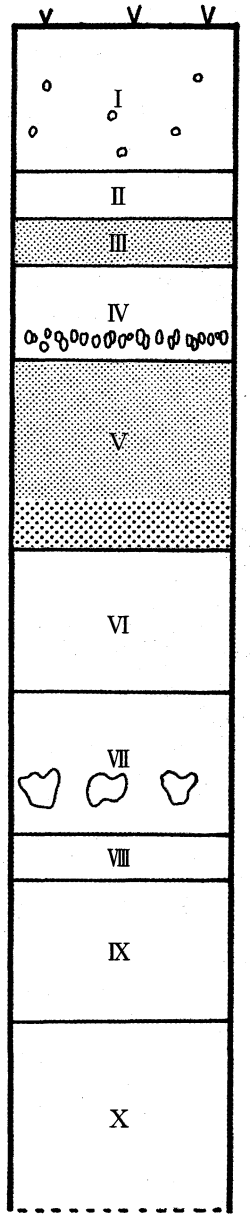
Ⅵ層：暗茶黒褐色土。縄文時代早期相当層である。色調・硬さ等により，ａ・ｂ層に細分できるところもある。

Ⅶ層：乳褐色火山灰土。硬質土で『サツマ』に比定される。場所によっては，ａ・ｂ層に細分されるところもある。

Ⅷ層：暗黒茶褐色土。縄文時代の草創期相当層である。場所によっては，認められない。

Ⅸ層：明茶褐色土。粘質土である。色調・硬さ等によって，ａ・ｂ層に細分できる。

Ｘ層：暗黄灰褐色火山灰土。いわゆる『ヌレシラス』である。一部には硬質なブロック状となるところもある。下部に砂利を包含する。

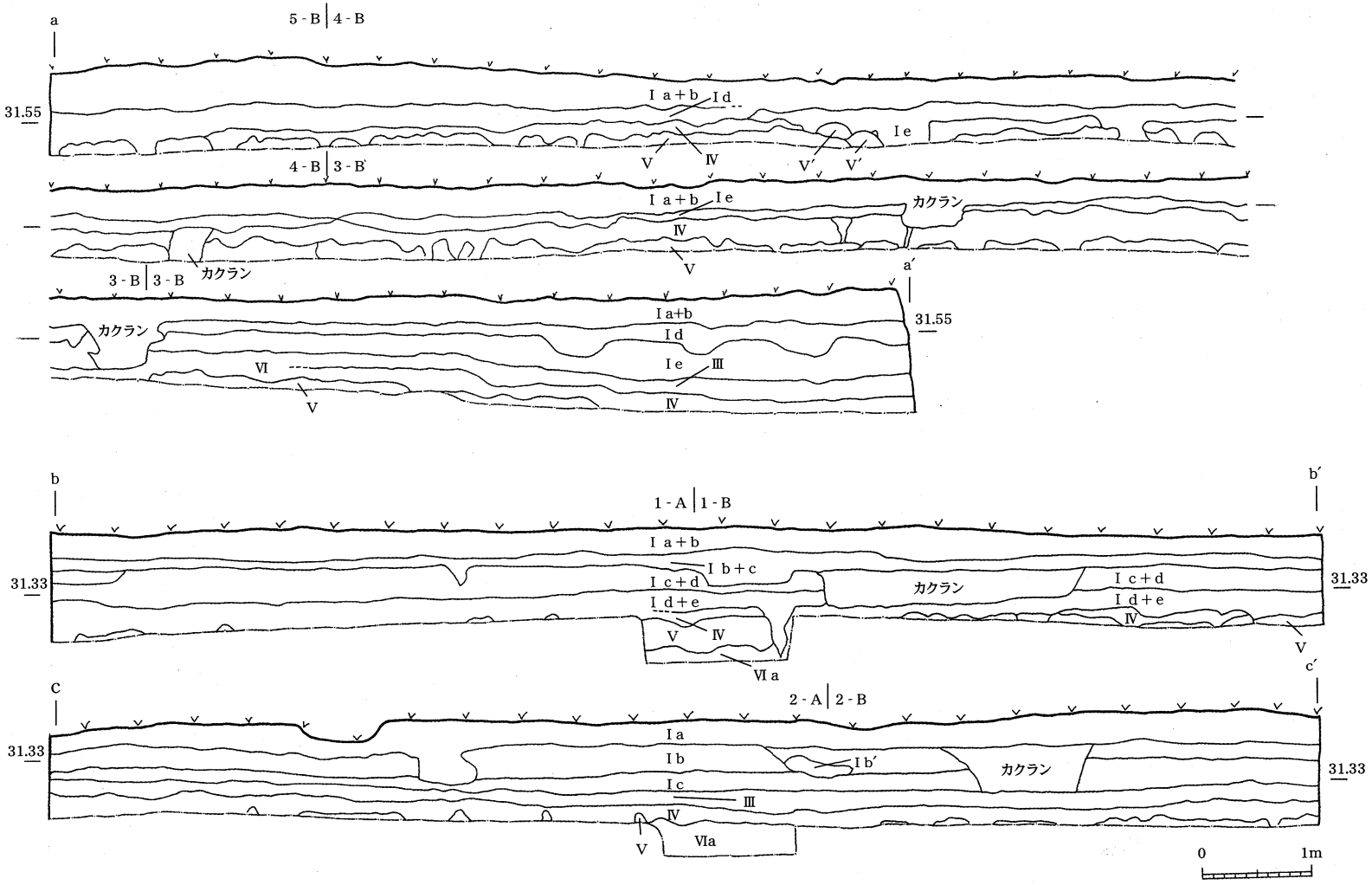


第4図　掘柱状図

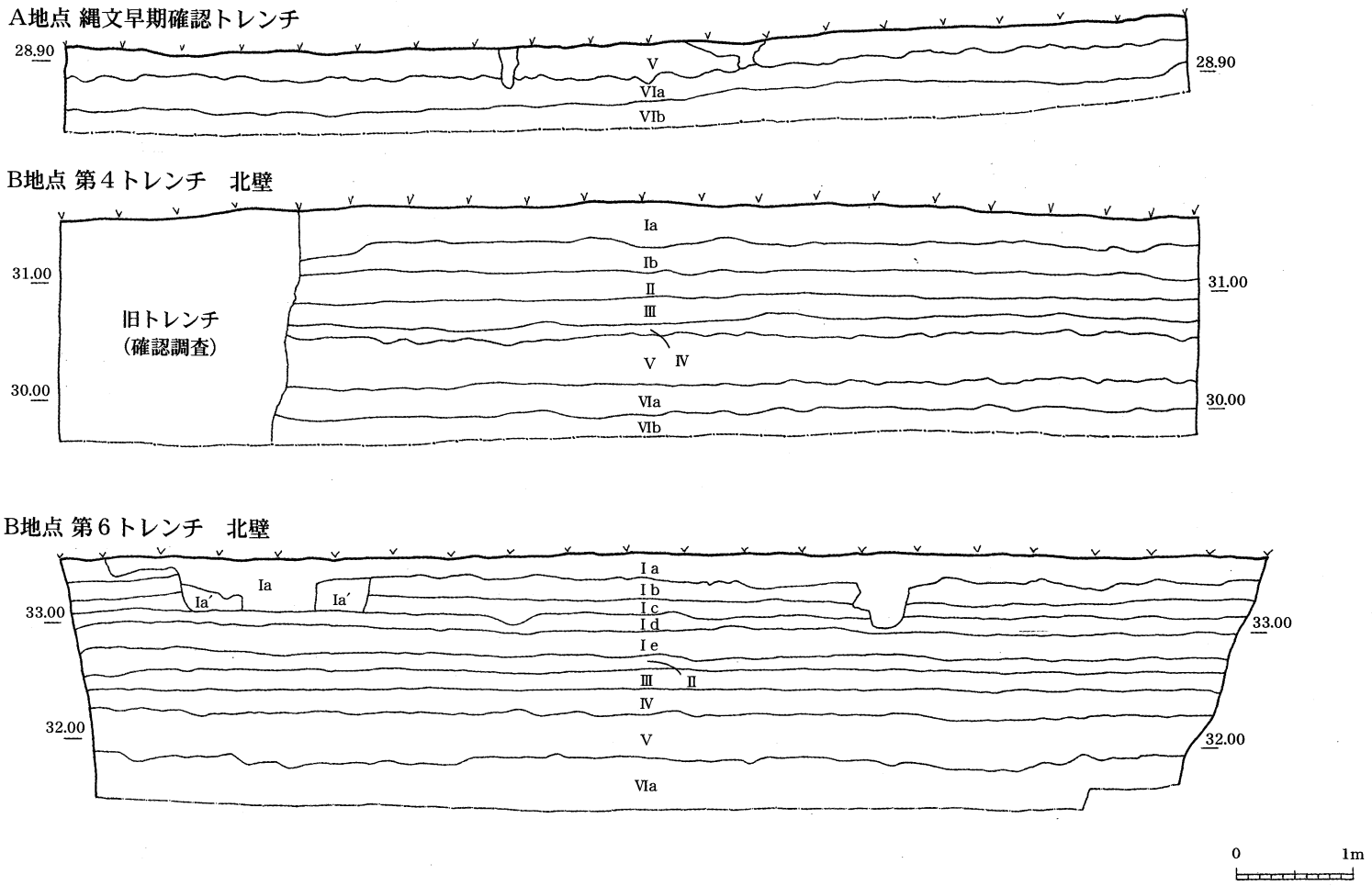
第２節　基本土層

平成10年度に実施した確認調査の結果から，遺物出土が認められた調査区西側をＡ地点，褐鉄鉱が検出された東側をＢ地点と大別し，それぞれ調査を実施した。

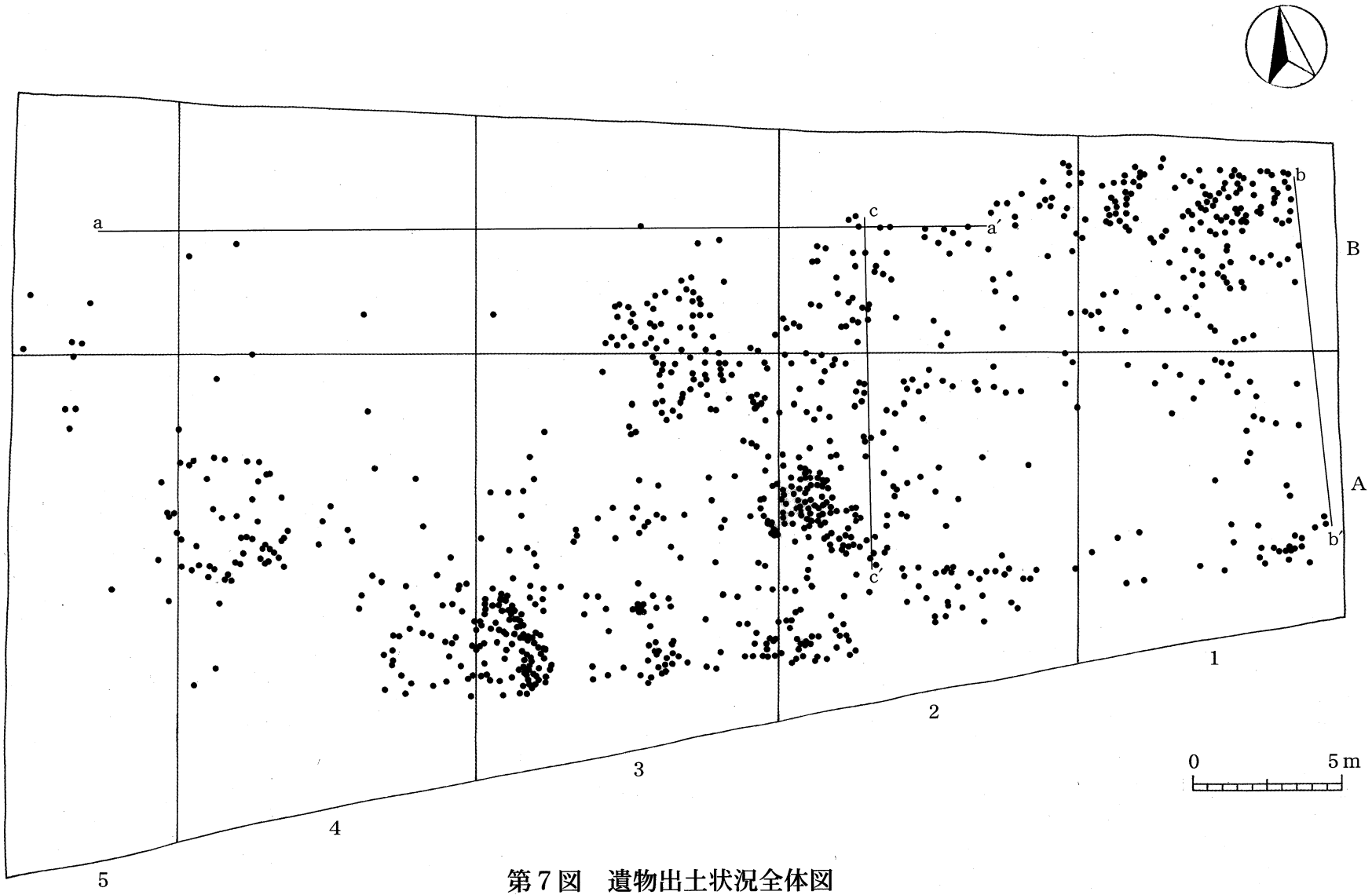
Ａ地点については，第１～第３の試掘トレンチにより，遺跡の詳細な範囲を限定するための試掘調査を実施した後に，耕作土・旧耕作土について重機により表土除去を行った。



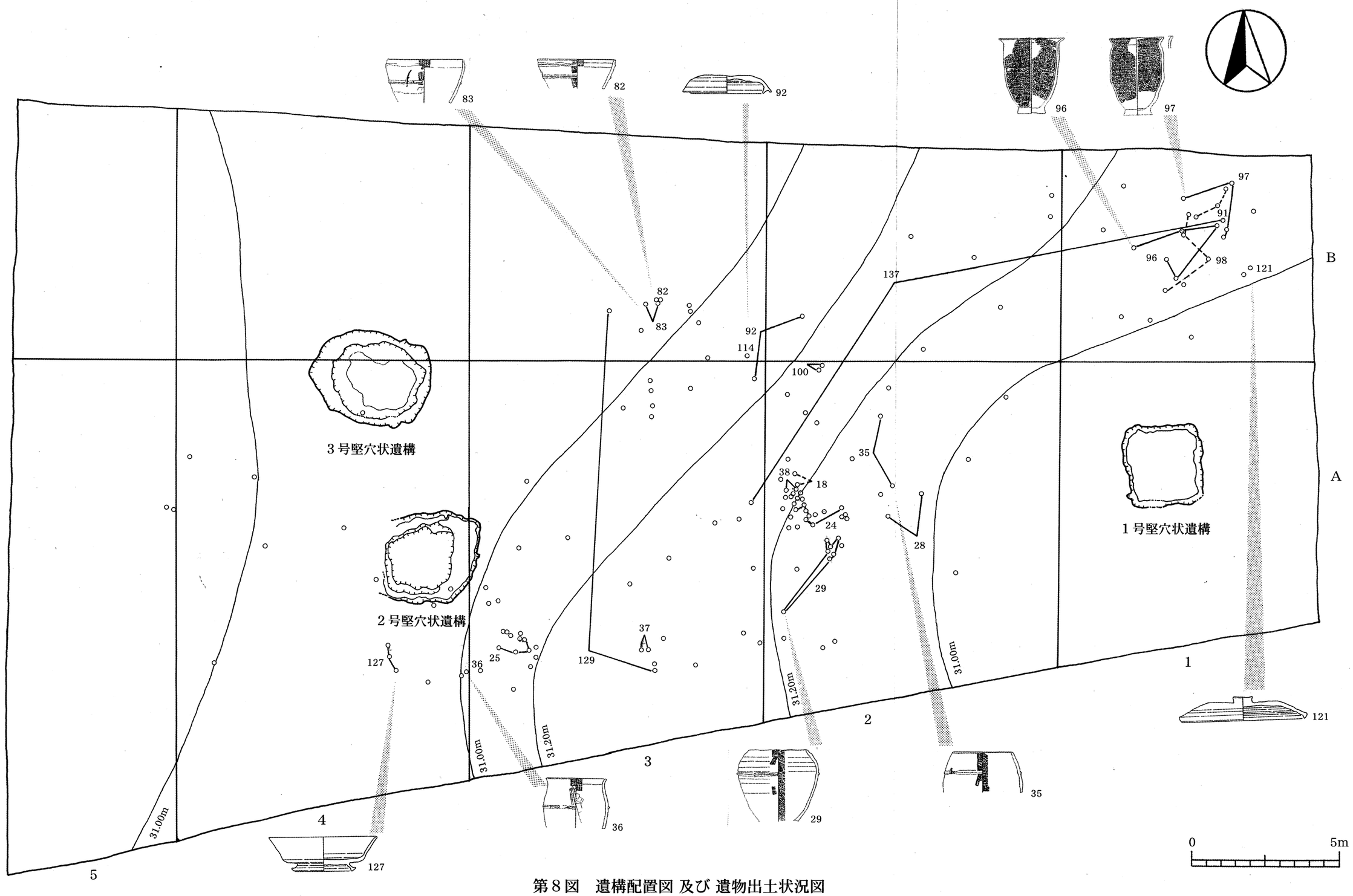
第５図　A地点 土層断面図



第６図　A･B地点 土層断面図



第７図　遺物出土状況全体図



第８図　遺構配置図 及び 遺物出土状況図

表土除去終了後，調査区東側から西側へ１～５，南側から北側へA・Bとし，１－A区，１－B区，２－A区，２－B区……と呼称するグリッドを設定し掘り下げた。

堆積状態の比較的良好な東側を中心に遺物集中が認められるとともに，V層に掘り込まれた計３基の竪穴状遺構を検出した。

遺構内にシラスと思われる砂質土が散布されていたが，明確な遺物が出土しなかった。竪穴住居跡の可能性から柱穴の存在を考慮し，周辺精査を行ったが，柱穴の検出には至らず，その性格を特定することができなかった。

B地点については，確認調査の結果，遺物の出土が認められなかったことを考慮し，V層上面部分までを重機で除去し，２×10mの大きさを基本とする第４～第６の試掘トレンチを設定し掘り下げ，褐鉄鉱の検出および採取を目的として調査を実施した。

第３節　遺構

遺構は，竪穴状遺構が３基検出された。この遺構の検出面はV層であった。

１．１号竪穴状遺構

１－A区のV層上面で色調の変化が認められた。遺物はみられたが，攪乱によるものか，古代～近代の細片遺物が出土した。一部消滅しているが，プランはやや不定形で，255㎝×265㎝の方形である。検出面からの深さは，最も深い部分で20㎝程度である。

２．２号竪穴状遺構

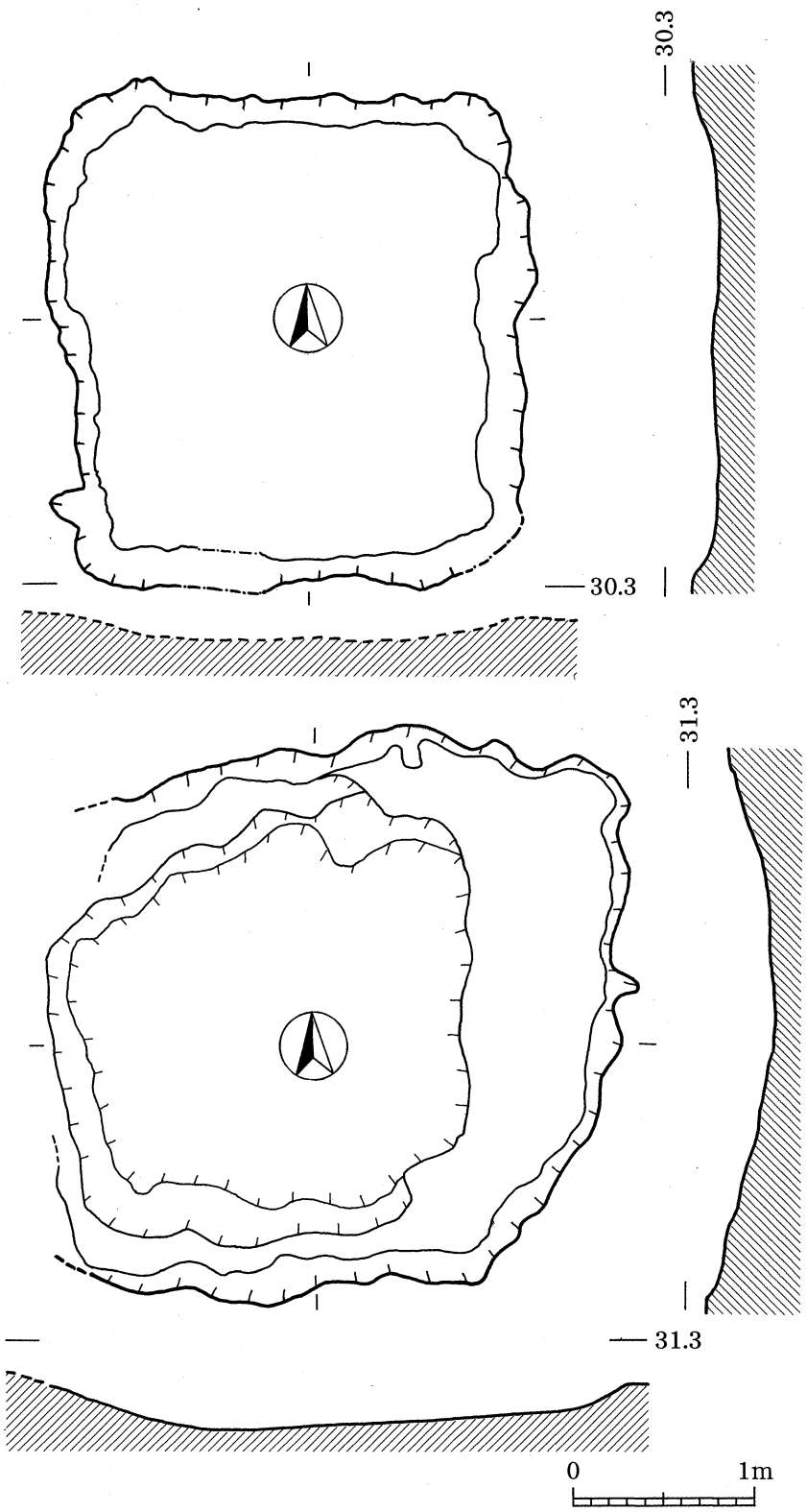
４－A区の東側に位置し，V層上面で色調の変化が認められた。遺物は認められたが，攪乱によるものか，古代～近代の細片遺物が出土した。西側が大きく削平を受けている。プランは不定形であるが，310㎝（残存部分）×290㎝のほぼ方形である。深さは最も深い部分で30㎝程度である。

３．３号竪穴状遺構

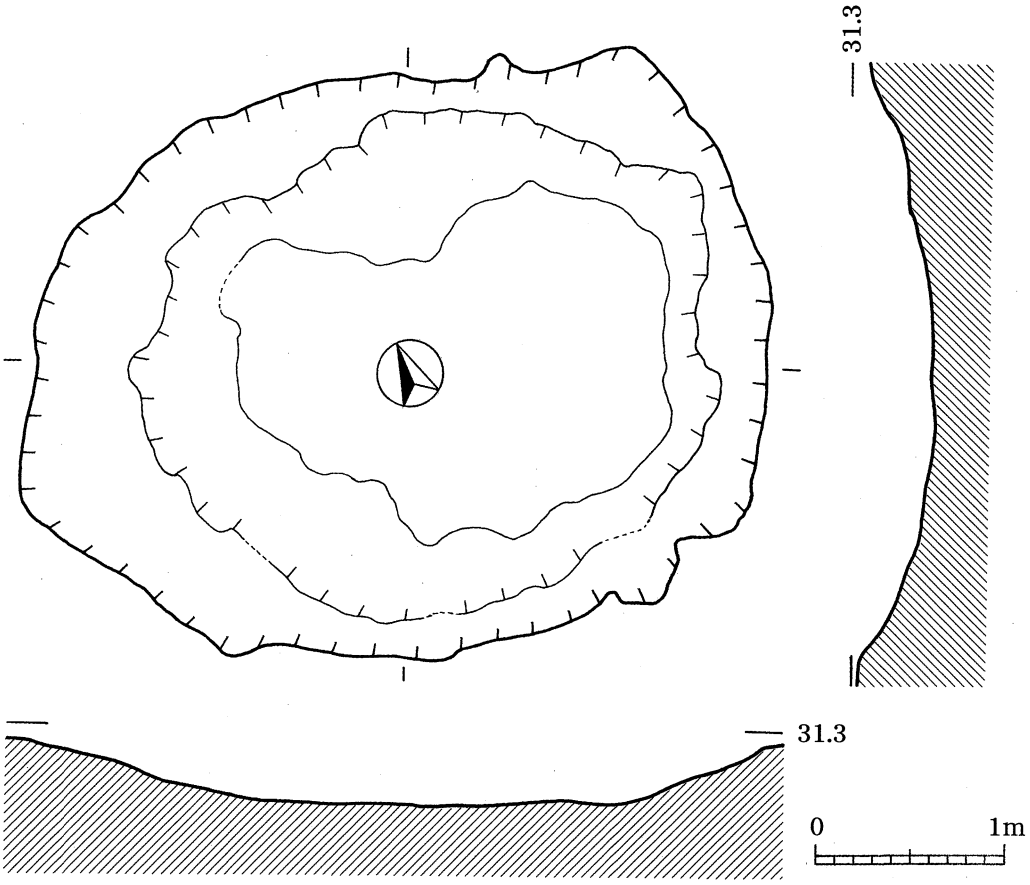
４－A区の北側に位置し，V層上面で色調の変化が認められた。遺物はみられたが，攪乱によるものか，古代～近代の細片遺物が出土した。プランは不定形であるが，385㎝×310㎝の楕円形である。深さは最も深い部分で40㎝程度である。

４．竪穴状遺構の立地について

竪穴状遺構の立地は，旧地形における比較的高い位置に立地しているようであり，調査区中央の小谷には位置していない。この小谷には硬化面は認められず，道として利用された可能性は薄いと考えられる。また，遺物が集中している場所と竪穴状遺構の立地が重ならないことからも不明な点が多い。



第９図　竪穴状遺構実測図（１・２号）



第10図　竪穴状遺構実測図(3号)

第４節　出土遺物

１.確認調査出土遺物

確認調査では，第１トレンチより14点の遺物出土が認められた。

１は若干外反する口縁部で，内外面とも粗いミガキが認められる。２は外反する口縁端部が内傾するもので，胎土に金雲母を含んでいる。４は胴部外面に突帯を巡らせるものである。

２.Ａ地点出土遺物（第13図 １～第27図 140）

縄文時代から平安時代までの遺物が，攪乱層であるＩ層から出土している。

３.縄文時代の出土遺物（第13図 ５ ～ 17）

口縁部の形状と文様構成から，第Ｉ～第Ⅵ類に分類した。

①第Ｉ類　（第13図 ５）

若干外反する口縁部が波状となるもので，凹線文が施されるものである。5は貝殻条痕を強く残している。

②第Ⅱ類　（第13図 ６）

口唇部に沈線を施すものである。６は口唇部平坦面に沈線及び斜位の刺突文が認められる。

③第Ⅲ類　（第13図 ７～10）

やや外反する口縁部の形状を成すもので，凹線文と刺突文で文様構成をするものである。

９は山形口縁となるもので，10は口縁部断面形が「く」の字状となるものである。

④第Ⅳ類　（第13図 11）

頸部に刺突文を施すものである。11は薄手である。

⑤第Ⅴ類　（第13図 12～14）

無文の縄文土器を一括した。12は短く外反する口縁部である。13は断面三角形となるもので，胎土に黒曜石を含んでいる。14は貝殻条痕が強く残る胴部破片である。

⑥第Ⅵ類　（第13図 15～17）

15，16は口縁部外面に数条の沈線を巡らすものである。15は若干内湾気味に立ち上がるもので，16は外反するものである。17は浅鉢の胴部である。

４.古墳時代～平安時代の出土遺物

（１）甕形土器（第14図 18 ～ 第27図 140）

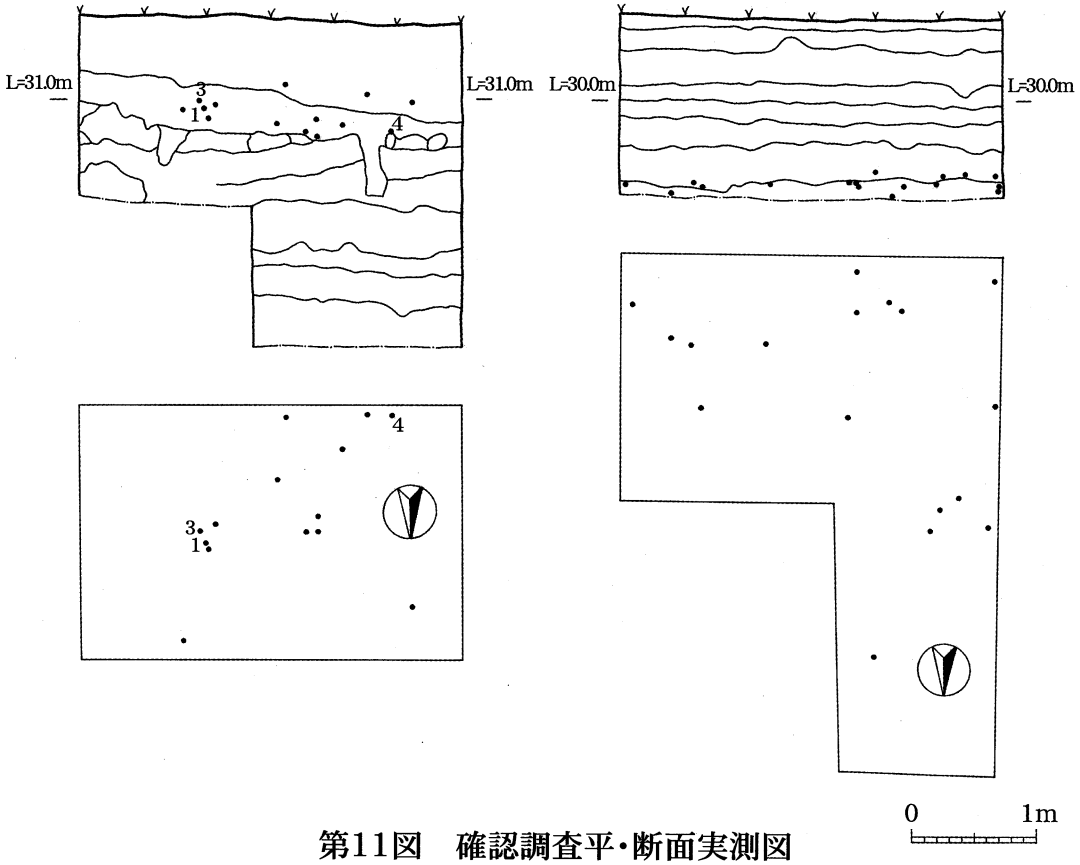
甕は，口縁部の形状にその主眼をおき，第Ｉ～第Ⅳ類に分類した。

①第Ｉ類　（第14図 18～21）

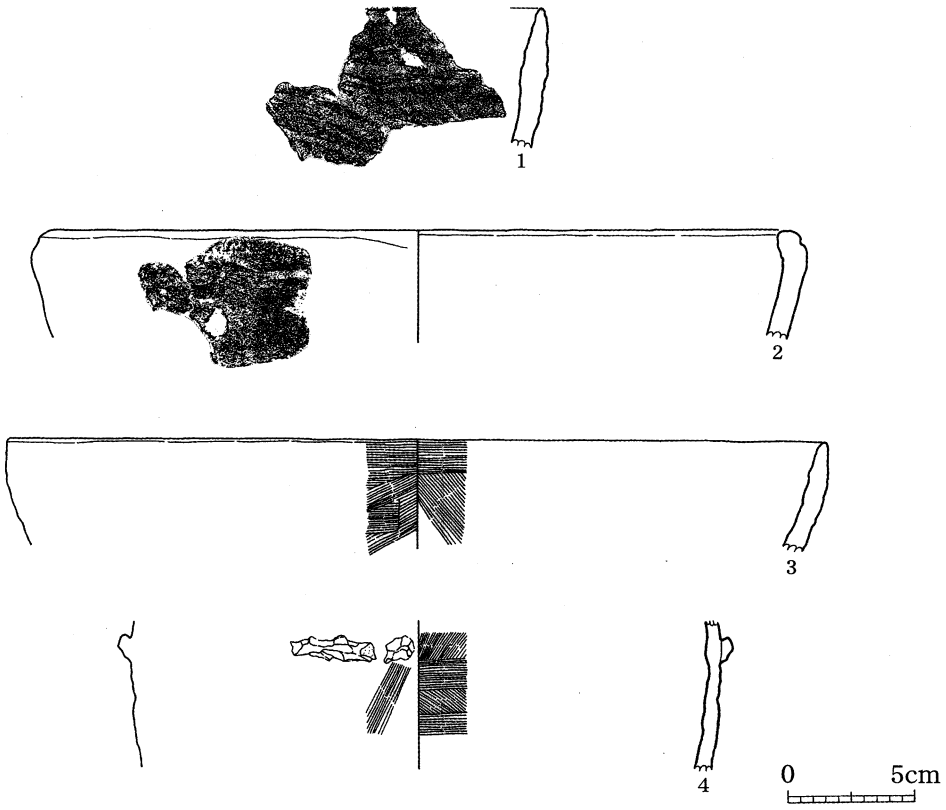
やや外反する口縁部をもつものである。18～20は指つまみ整形の突帯（以下，指つまみ突帯）を有するものであるが，19は整形後に爪形の刻みが施されている。21は突帯を刷り上げるように断列させるもの（以下，断列突帯）で，上位に粘土つぶが認められる。

②第Ⅱ類　（第14図 22 ～ 第15図 27）

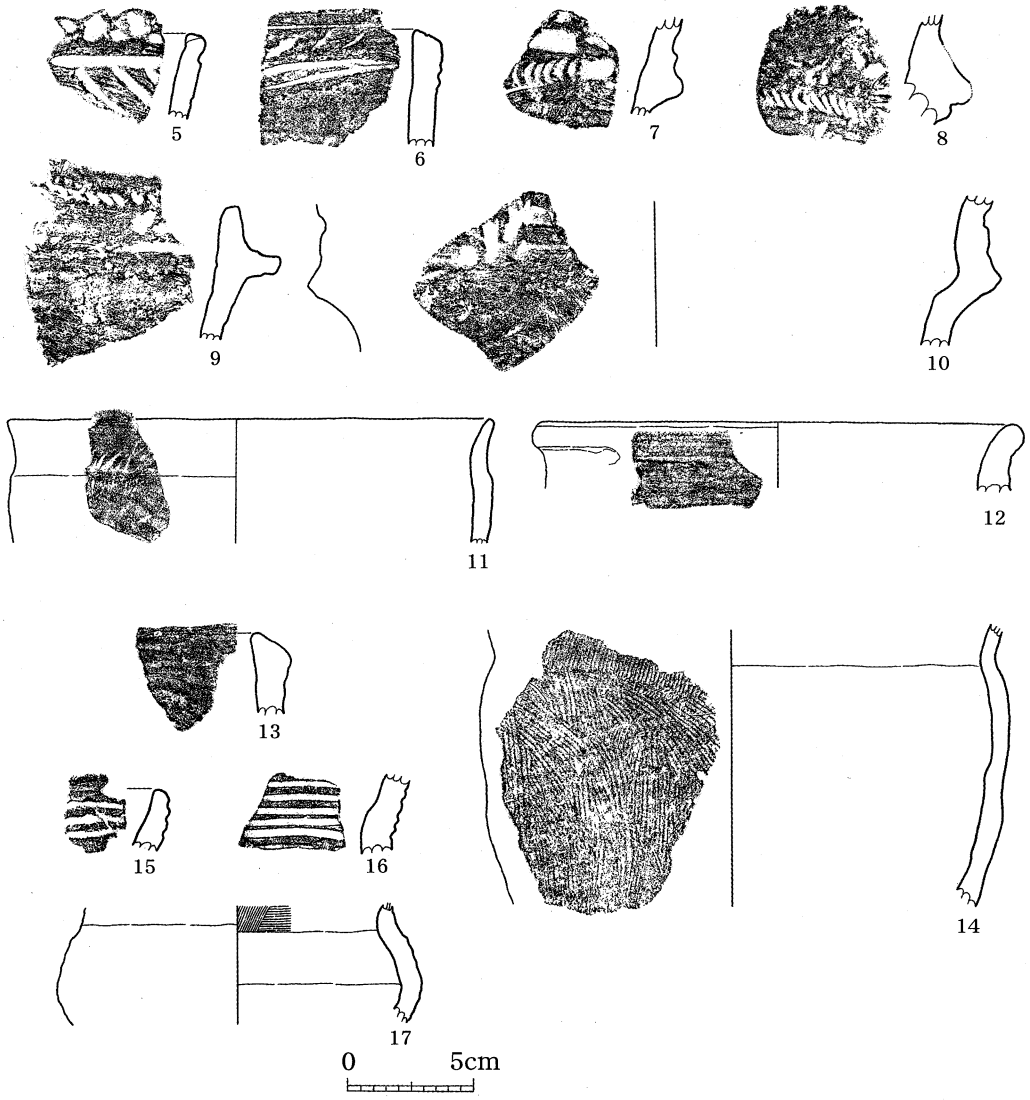
直行気味の口縁部をもつものである。22は指つまみ突帯であるが，突帯の上面文様帯のみに認められる。24はいわゆる絡縄突帯である。25は直行気味に立ち上がる口縁端部が内傾するものである。25，26は断列突帯であるが，26は擦り上げ痕が認められる。28は内湾気味に立ち上がるものである。



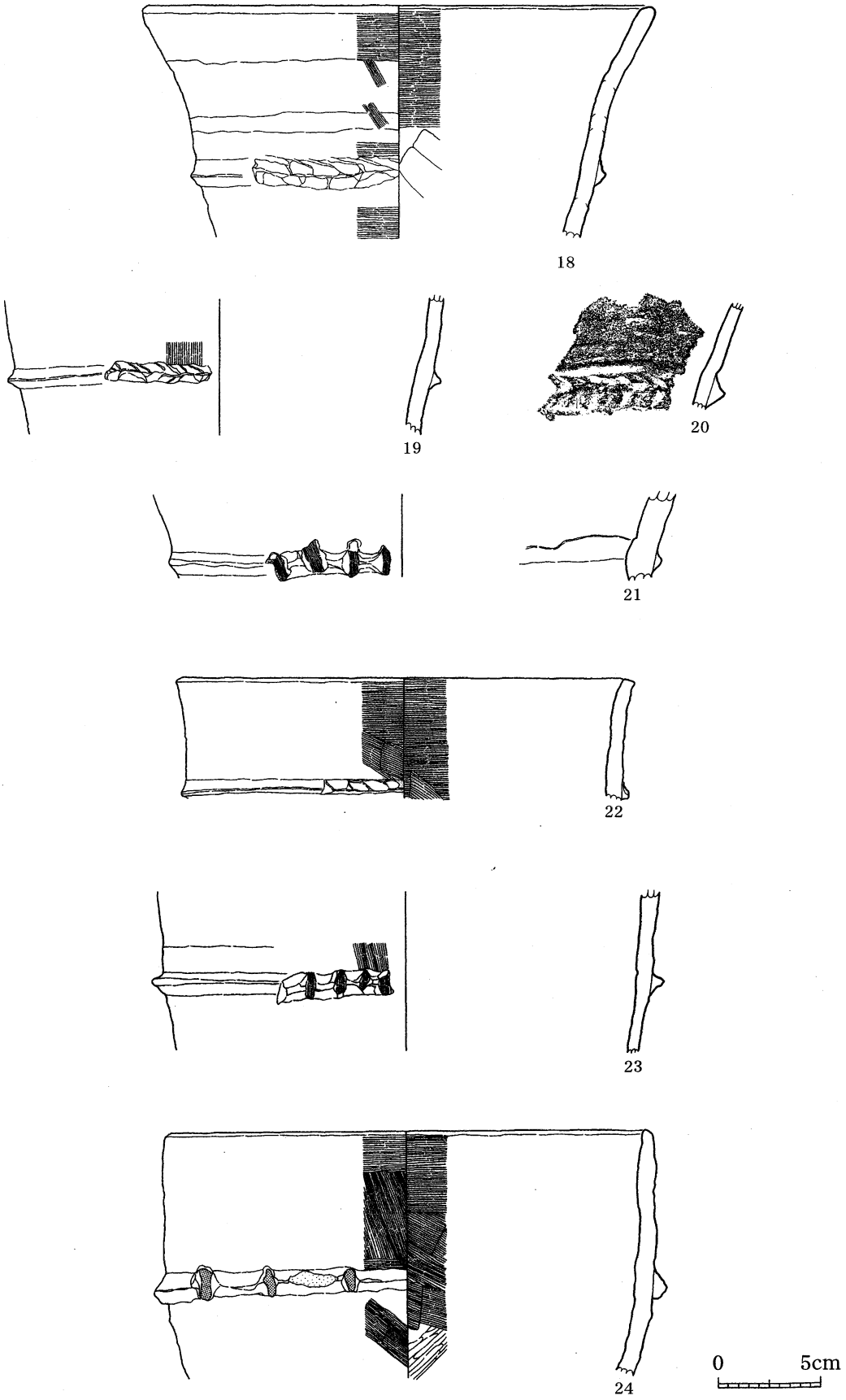
第11図　確認調査平・断面実測図



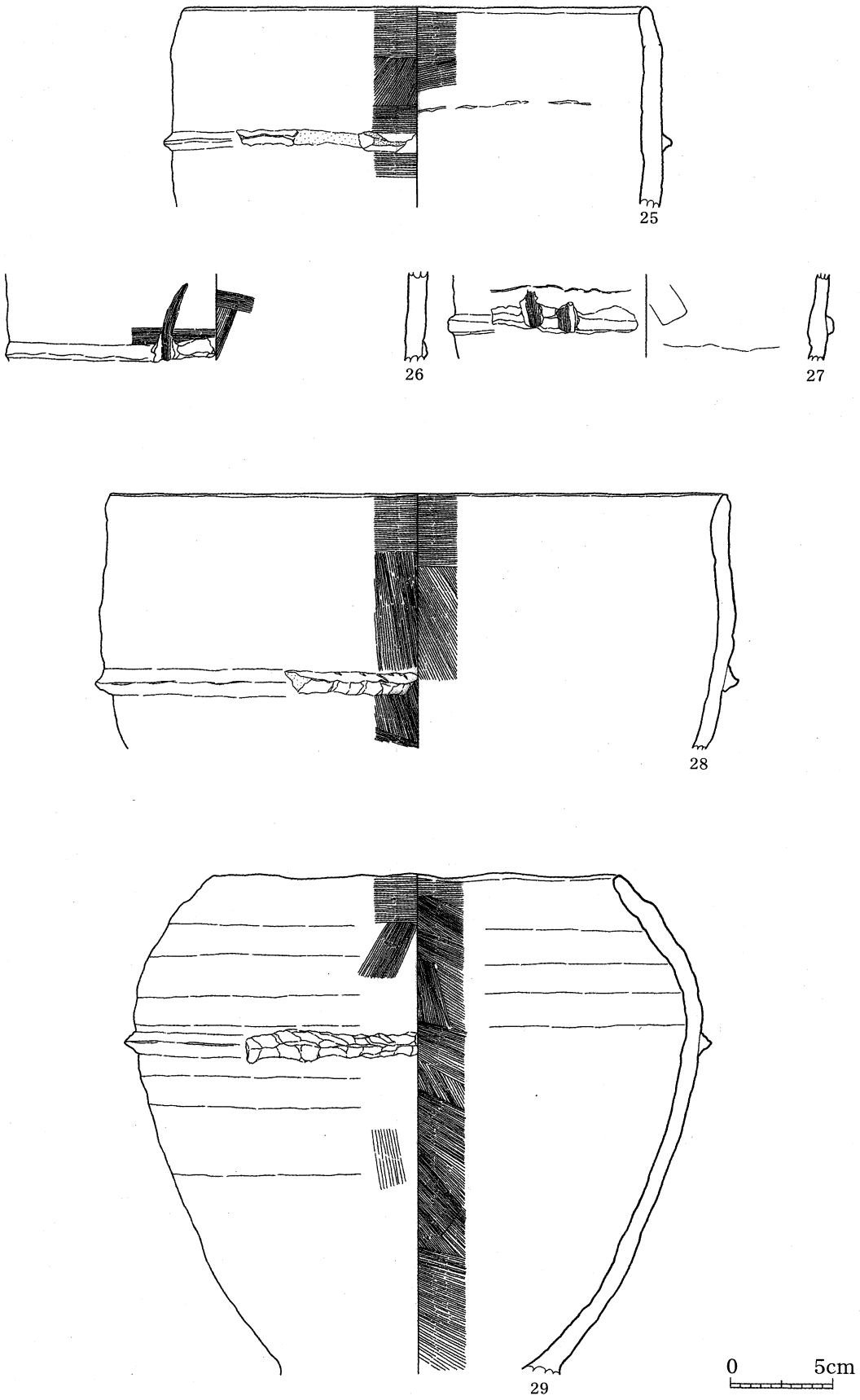
第12図　出土遺物実測図(1)



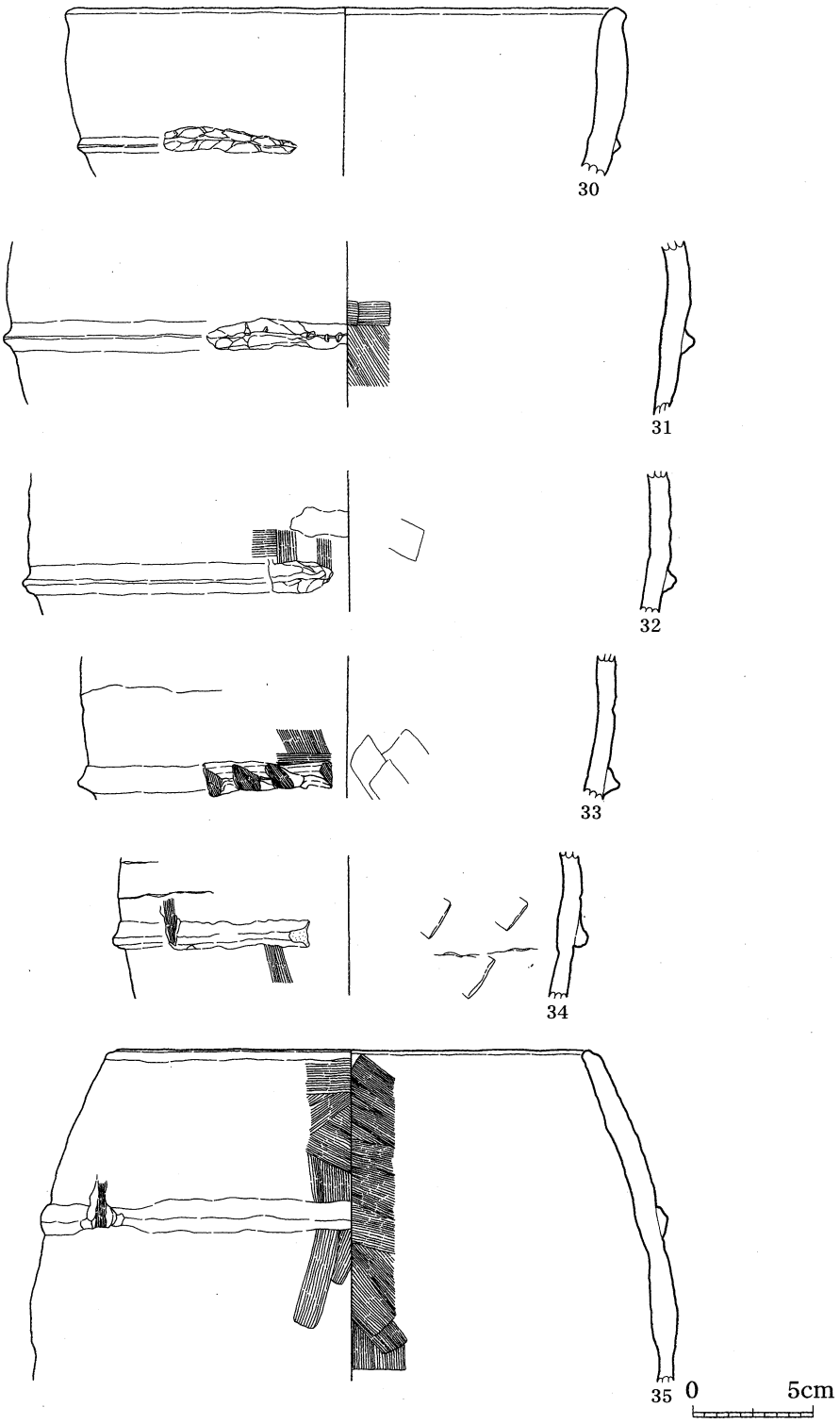
第13図　出土遺物実測図(2)



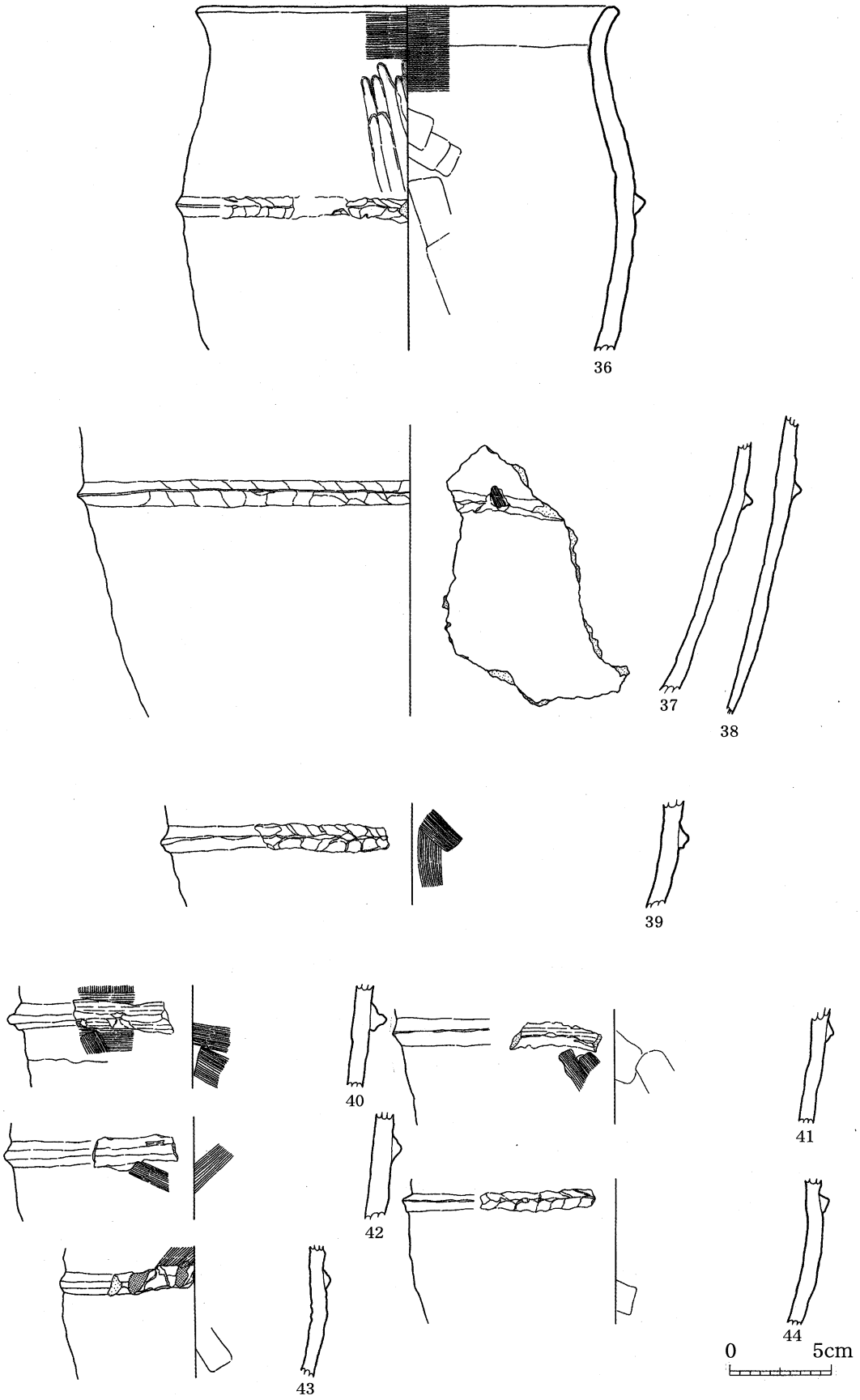
第14図　出土遺物実測図(3)



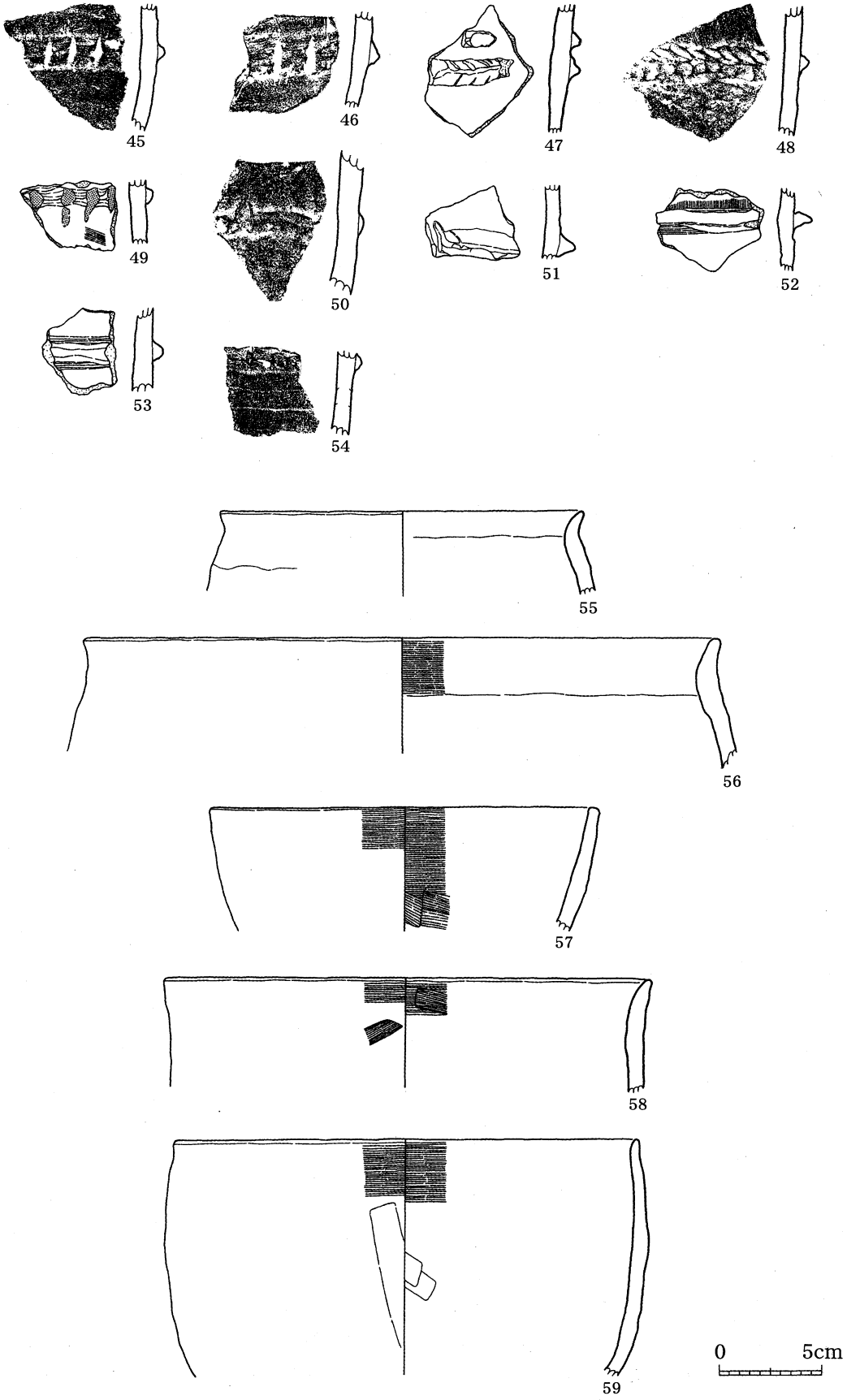
第15図　出土遺物実測図(4)



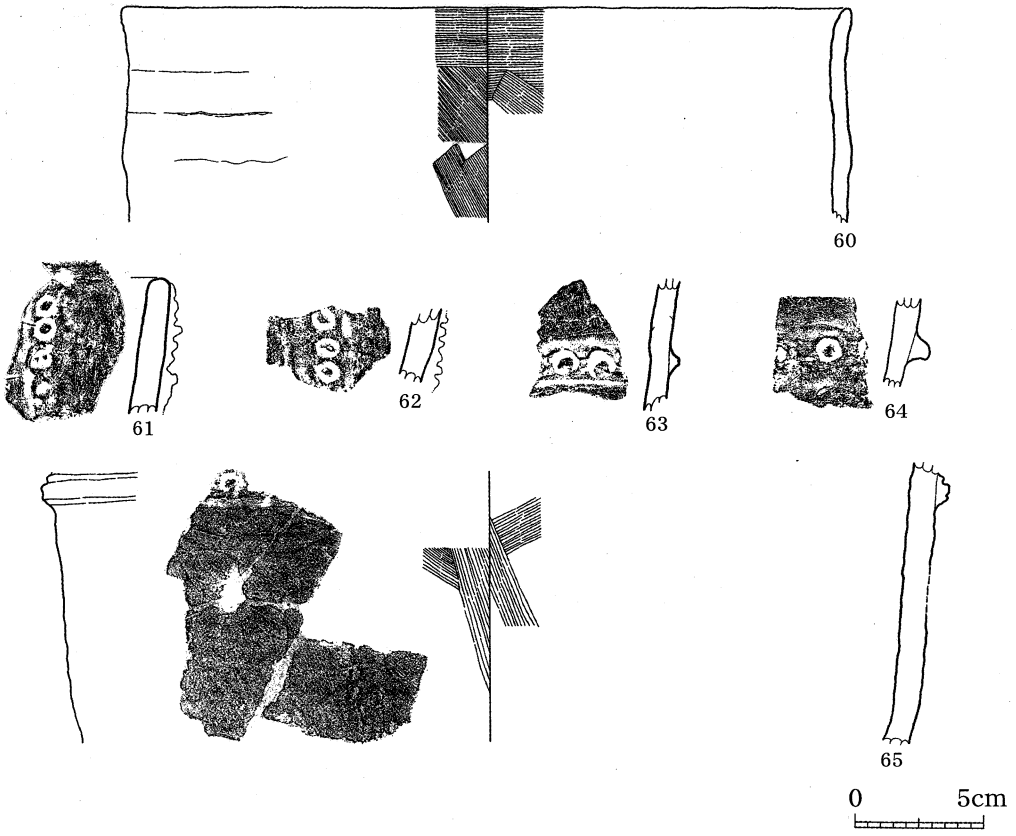
第16図　出土遺物実測図(5)



第17図　出土遺物実測図(6)



第18図　出土遺物実測図(7)



第19図　出土遺物実測図(8)

③第Ⅲ類　(第15図 29 ～ 第16図 34)

内湾する口縁部をもつものである。29は大きく内湾する口縁部をもつもので，胴部には指つまみ突帯を有し，内外面ともに粘土の継目が明確に残り，歪んでいる。31は不規則な刻み目を有するもので，32はすれ違う突帯部分がみられる。

④第Ⅳ類　(第16図 35 ～ 第17図 36)

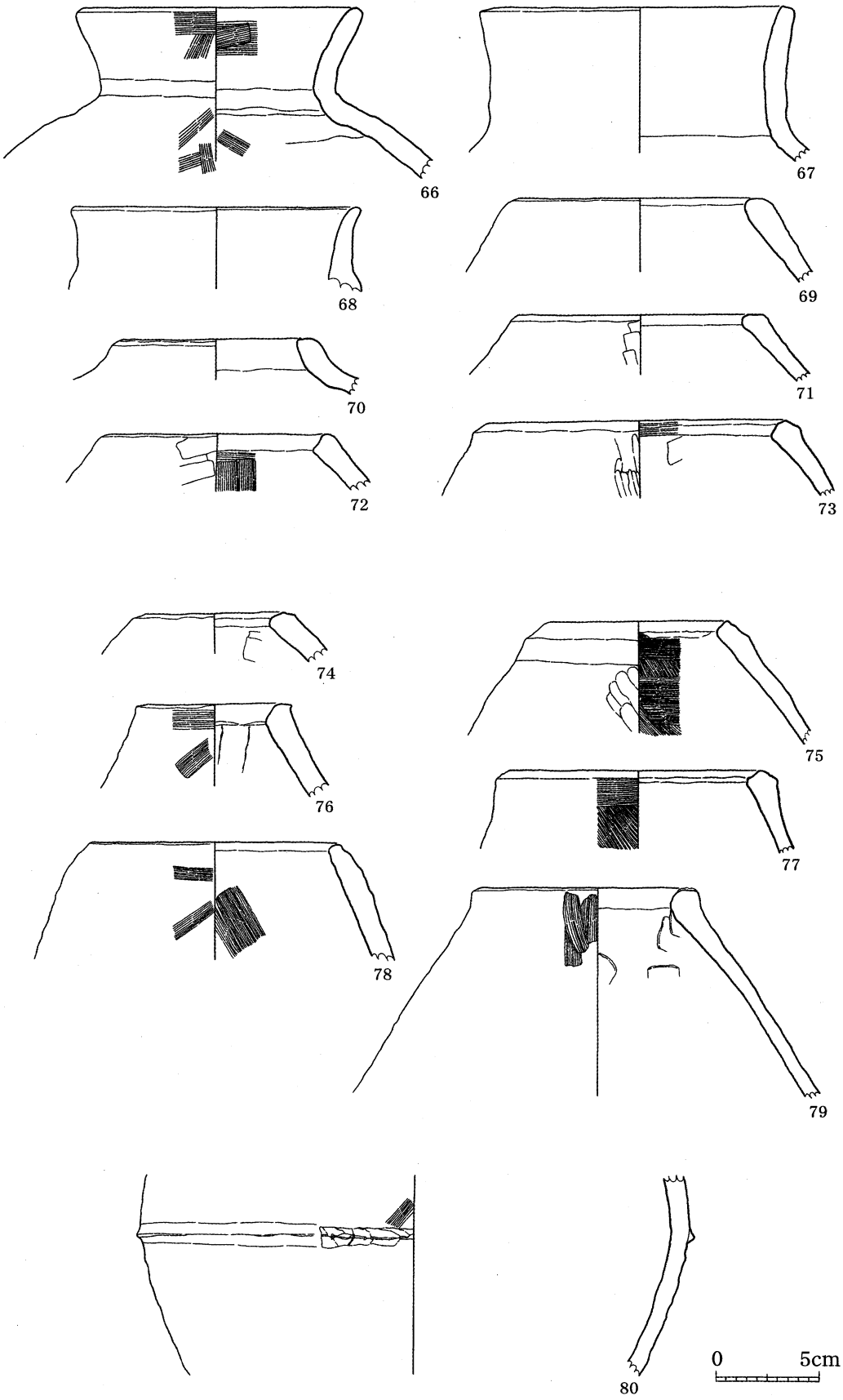
その他の口縁部である。35は胴部から内傾しながらそのまま口縁部へすぼまるものである。36は張りのある胴部から内傾しながら口縁部へ至り，口縁端部を若干外反させるものである。外面に棒状工具による調整痕？がみられる。

⑤胴　部　(第17図 37 ～ 第18図 54)

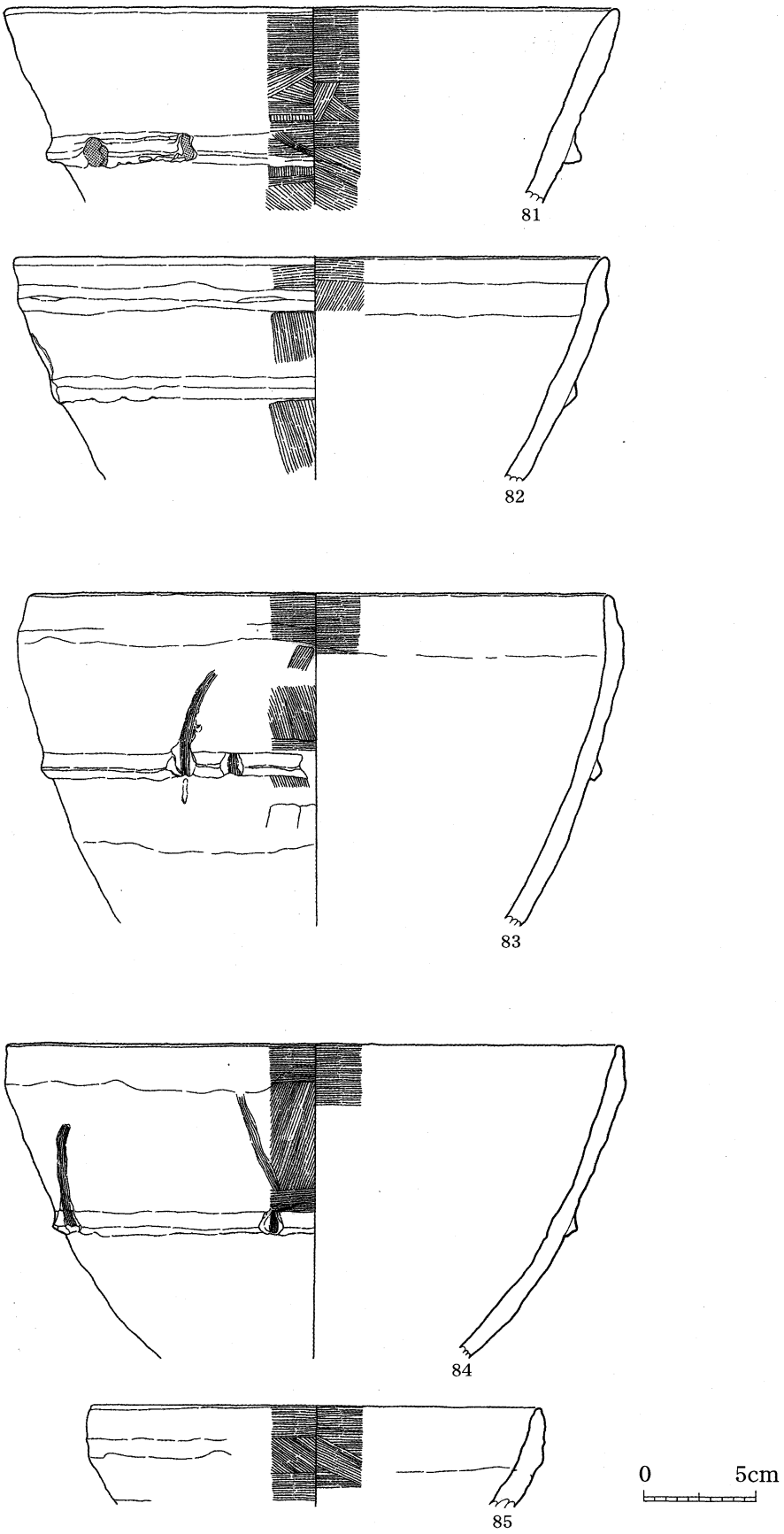
胴部に１条の突帯を有する胴部破片である。38, 39, 44は指つまみ突帯であるが，44は刻み目を有する。40～42は断面三角形状の突帯であるが，43は絡縄突帯である。45, 46は刻目突帯を密に施すものである。47は爪形の刻みが認められ，49は絡縄突帯である。50, 51は断列突帯である。

⑥その他　(第18図 55 ～ 第19図 65)

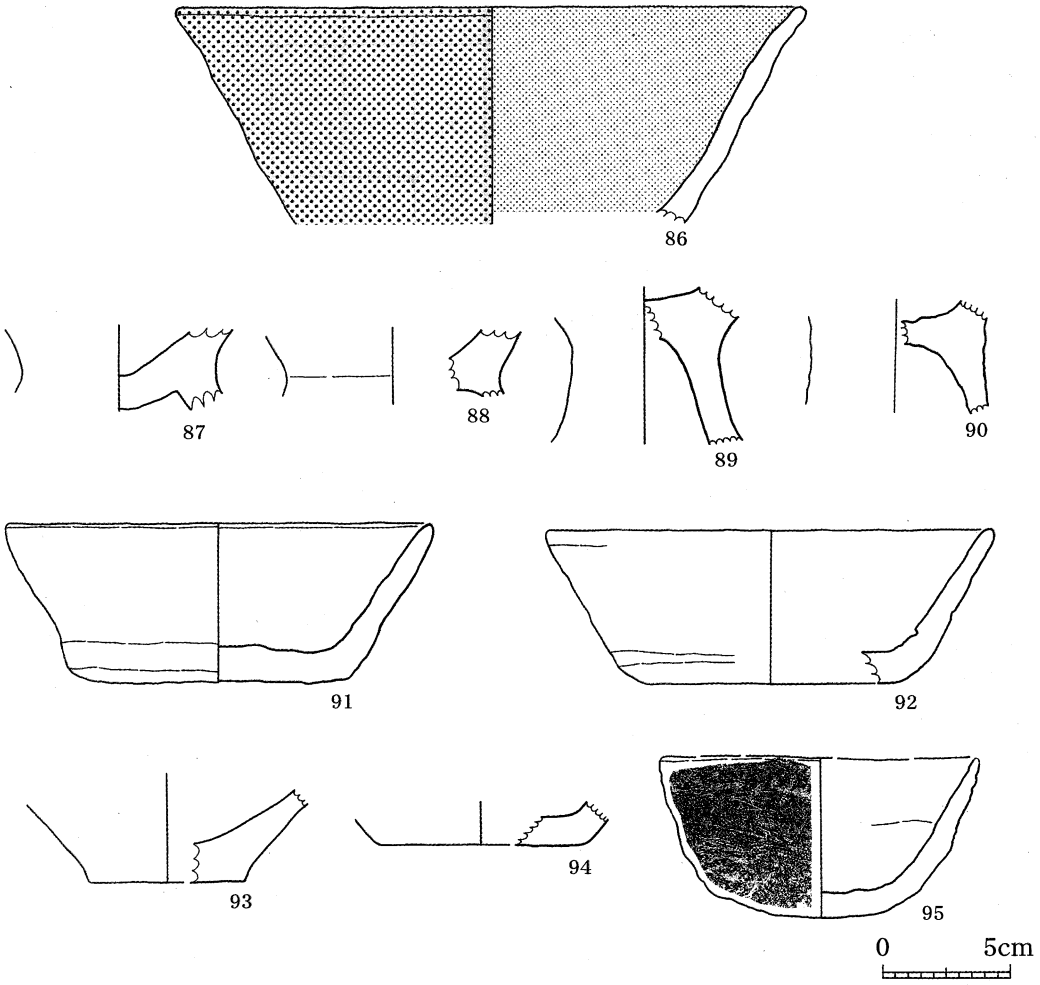
55～60は胴部に突帯を有しないものであるが，破片のためみられないものも存在する可能性



第20図　出土遺物実測図(9)



第21図　出土遺物実測図(10)



第22図　出土遺物実測図(11)

がある。55, 56は胴部から内傾しながら口縁部へ至り，口縁端部が若干外反するもので，形状は36と類似している。58は直行気味の口縁端部が若干外反するもので，59,60は直行気味の口縁部であるが，器壁が薄手のものである。

61～65は突帯上に竹管文を施すものである。61, 62は縦位の突帯に施すものであるが，63～65は横位に施文されている。

(2)壺形土器　(第20図 66～80)

壺は，口縁部の形状にその主眼をおき，第Ⅰ・第Ⅱ類に分類した。

①第Ⅰ類　(第20図 66～68)

いわゆる有頸壺である。66は大きく外反する口縁部をもつもので，67は直行気味の口縁で，内外面とも若干摩滅している。

②第Ⅱ類　(第20図 69～79)

いわゆる無頸壺である。69～71は口唇部に平坦面をもつものである。73～75は口縁部外面に明確な稜線を有する。77, 79は肥厚口縁となるもので，79の口唇部には粘土つぶが認められる。

③胴　部　(第20図 80)

80は壺の胴部で,指つまみ整形の後に刻み目が施されている。

(3)鉢形土器　(第21図 81, 82)

直線的に開く形状の口縁部をもつものである。81は絡縄突帯を1条有するもので,82は口縁端部が,外傾しながら立ち上がるものである。

(4)高坏形土器　(第21図 83 ～ 第22図 86)

内湾気味に開く形状の口縁端部が直立するものと,直線的に開く形状のものの両方が存在するようである。83, 84はいずれも断列突帯であるが,83は断列の間隔が狭いが,84は比較的広いようである。85は内外面ともに粘土の継目がみられる。86は内外面ともにミガキ仕上げで,丹塗りがみられる。

(5)底　部　(第22図 87～90)

器種による底部の分類が不明確であったため,一括して説明することとする。

87, 88は甕形土器或いは鉢形土器の底部とみられるものである。87は底部内面天井が下方へさがるものである。88は金雲母を多量に含む。

89, 90は高坏形土器の底部と思われるもので,内外面ともミガキ仕上げである。

(6)小型鉢　(第22図 91～94)

口縁部が直行する形状で器高の低い鉢を小型鉢とした。91, 92の内面は回転ケズリである。93, 94は小型鉢の底部とみられるもので,いずれもミガキ仕上げである。

(7)椀　(第22図 95)

丸底で半球形状ものを椀とした。95は器壁に凹凸があり,黒斑も認められる。外面には不規則な線刻がみられる。

(8)甕形土器　(第23図 96 ～ 第24図 98)

(1)甕形土器と器形等が異なるため,ここで取り扱うこととした。

張りをもたない胴部から強く外反する口縁部となるものである。口唇部はやや角張っており,頸部内面には明確な稜をもつ。内面には粘土の継目がみられ,外面は継目こそ認められないが,器面に凹凸がみられる。内面調整は工具ナデで,外面調整はハケナデである。若干上げ底気味の平底で,底部には木葉痕が認められる。

96は口径22.2㎝,器高25.1㎝を測る。胴部内面には工具による粗い調整痕が残る。97は若干ではあるが歪みがみられる。復元口径18.4㎝,器高25.9㎝を測る。胴部外面にはハケ目が認められ,内面には粘土の継目がみられる。98はやや張る胴部から強く外反する短い口縁となるものであるが,胴部に歪みがみられる。

(9)底　部　(第24図 99 ～ 第25図 113)

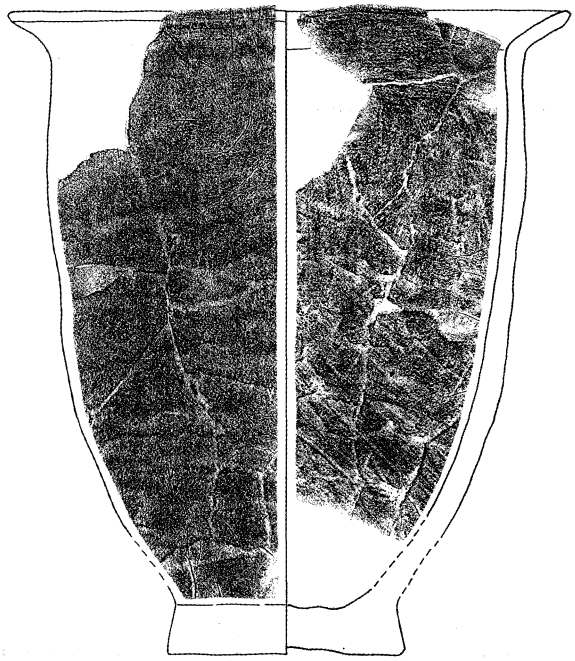
上記甕形土器の底部と思われるものを一括して説明することとし,底部外面形状に主眼をおき第Ⅰ～第Ⅳ類に分類した。

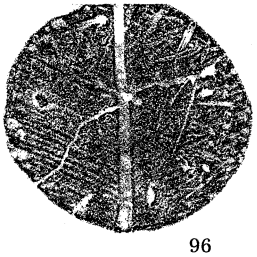
①第Ⅰ類　(第24図 99～102)

底部端からゆるやかにくびれて開くものである。99は底部の器壁が厚手のもので,木の葉を2枚使用したようである。100は中央が窪むもので,102と同様に若干上げ底気味となるものであるが,101は平底である。

②第Ⅱ類　(第24図 103～105)

底部端から直線的に開くものである。103は細い葉脈が認められる。



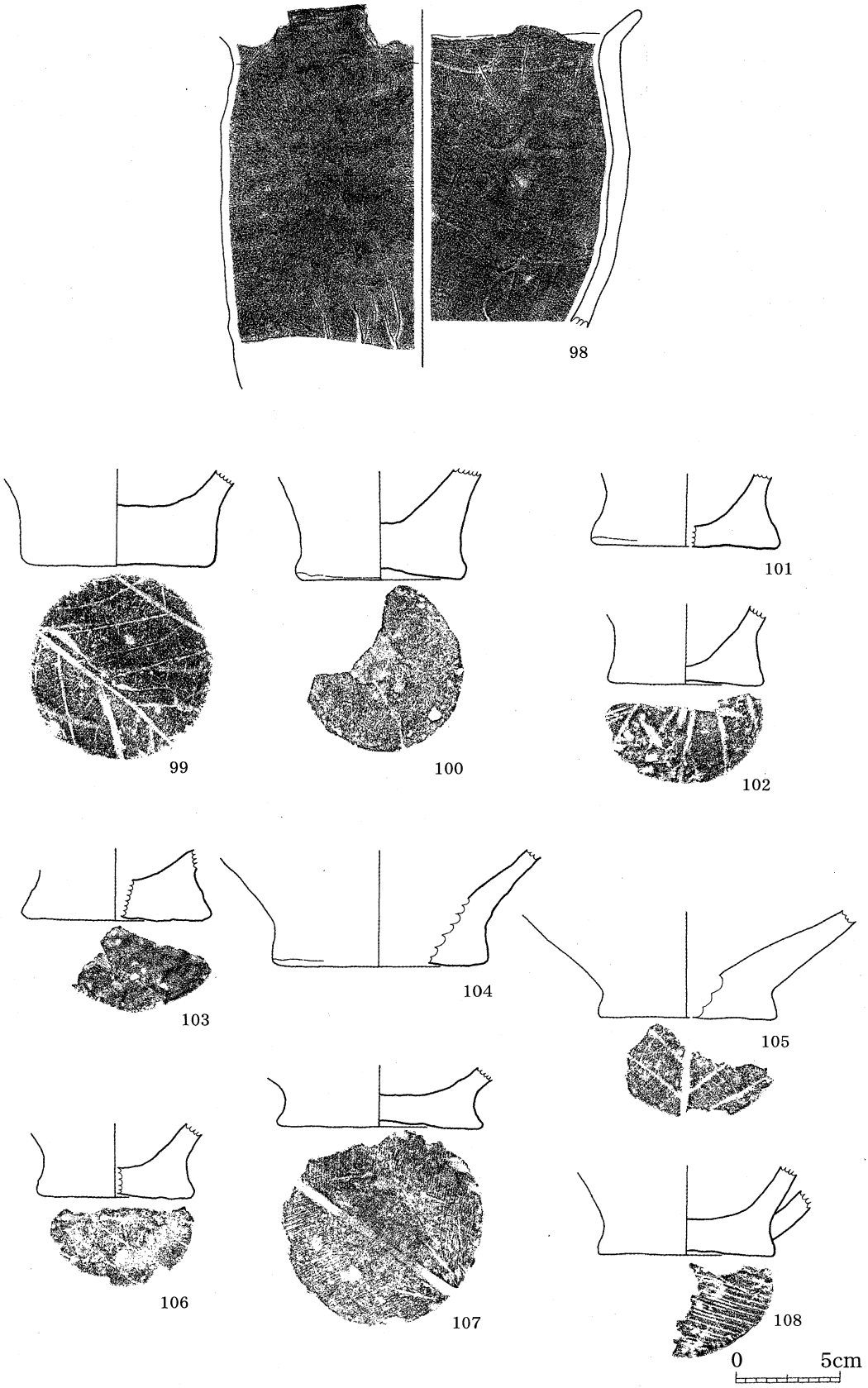


96

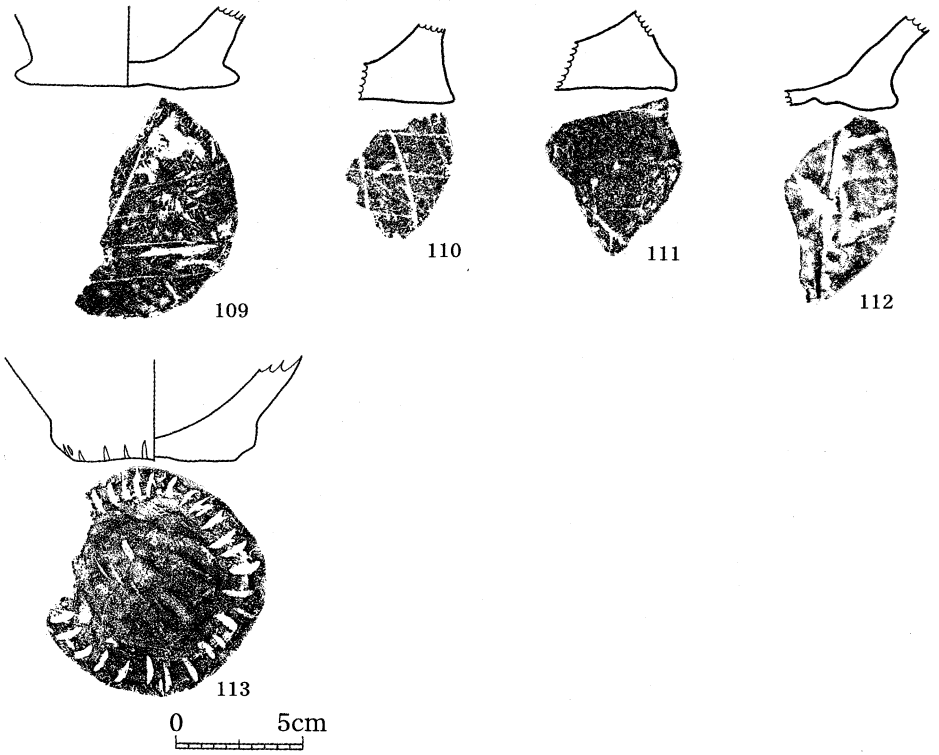
97

0　　5cm

第23図　出土遺物実測図(12)



第24図　出土遺物実測図(13)



第25図　出土遺物実測図(14)

③第Ⅲ類　(第24図 106～108)

底部端から大きくくびれて開くものである。107は細い葉脈が無数にみられる木葉底である。108は歪みが認められるもので，貝殻条痕がみられる。

④第Ⅳ類　(第25図 109)

底部端の張り出しが強いものである。109は平底の木葉底である。

⑤その他　(第25図 110～113)

110～112は底部が歪んでいるものである。110は木葉痕の上から格子状の線刻が施され，112は木の葉を裏返して使用している。

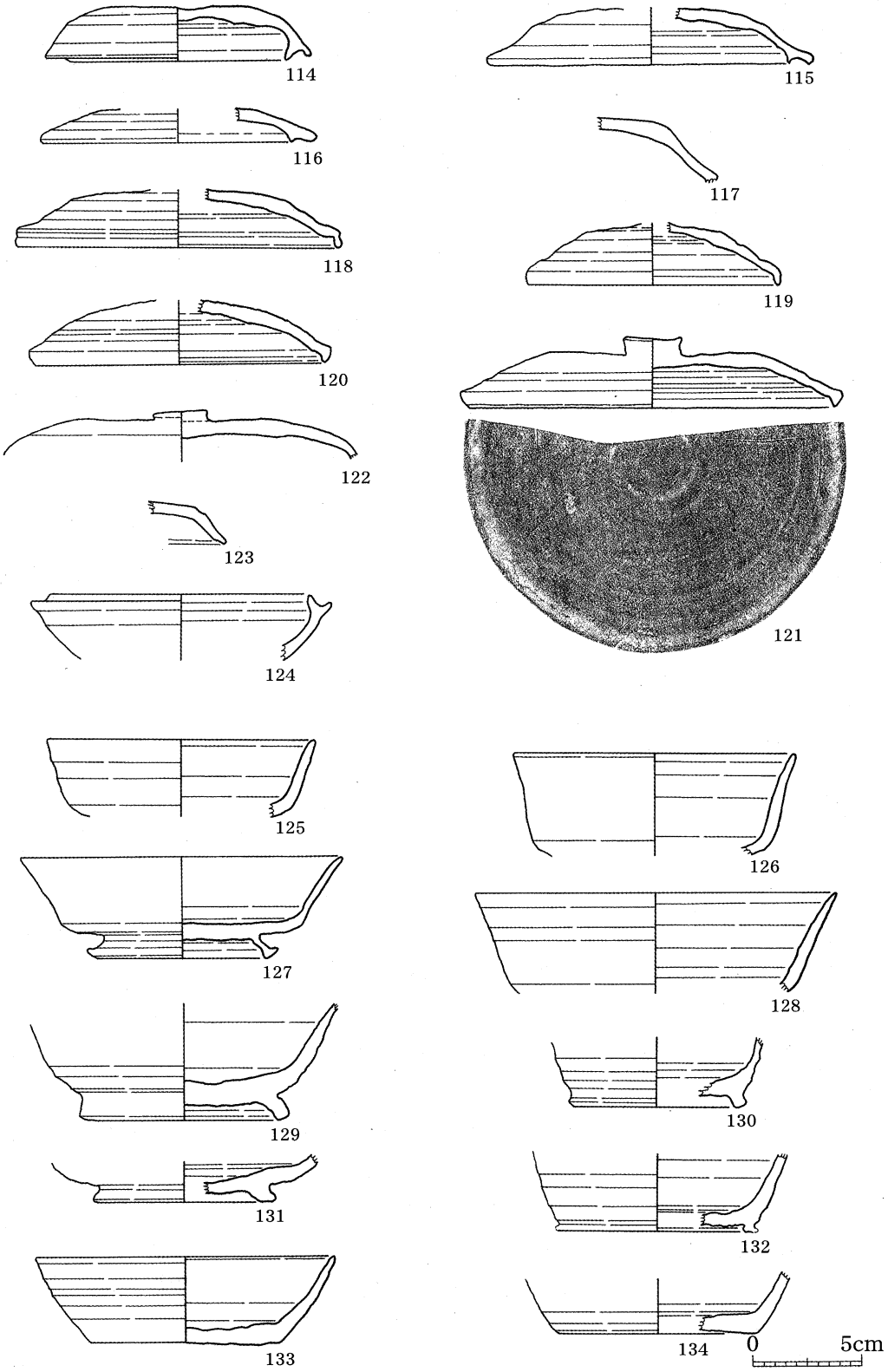
113は底部端に線刻を施すもので，外面はミガキ仕上げである。

(10)須恵器　(第26図 114 ～ 第27図 136)

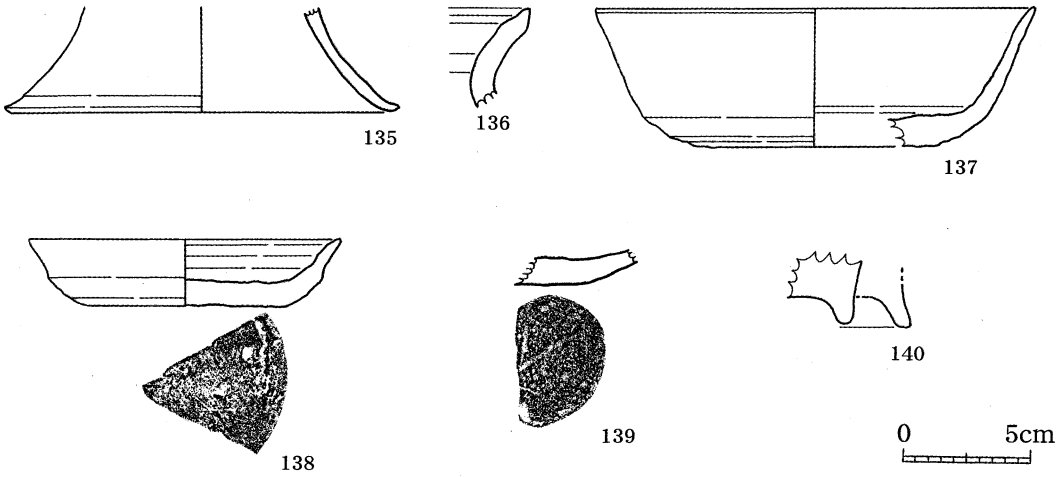
須恵器は，坏蓋(114～123)，坏身(124～134)，高坏(135)，甕(136)が出土した。

①坏　蓋　(第26図 114～123)

114～123は坏蓋である。114～116は返しを有するものである。114は口径9.8㎝，器高2.5㎝である。118は玉縁状口縁である。120，121は嗽状口縁を呈し，扁平なつまみが貼り付けられている。121は口径16.6㎝，器高3.2㎝，つまみの直径2.7㎝で，内面にはヘラ記号もみられる。122は直径2.5㎝のつまみを貼り付けているが，歪んでいる。123は口縁部端が外側に開いている。



第26図　出土遺物実測図(15)



第27図　出土遺物実測図(16)

②坏　身　(第26図 124～134)

124～134は坏身である。124は復元口径11.8cmで，蓋受けを有する坏身である。127は復元口径14.6cm，器高4.6cm，底径7.6cmで，底部は回転ヘラケズリである。129は底径8.8cmで底部は回転ヘラ切り離しである。133は復元口径13.6cmを測り，焼成不良である。

③高　坏　(第27図 135)

135は高坏の脚部であり，内外面とも摩滅している。

④甕 (第27図 136)

136は甕の口縁部であり，内外面とも摩滅している。

(11)土師器　(第27図 137～140)

137は復元口径16.9cm，器高5.4cmの椀で，内外面とも摩滅している。138は復元口径12.1cm，復元底径7.7cm，器高2.6cmの皿で，内外面とも摩滅している。139は皿であるが，底部に木の葉状の線刻がみられる。140は高台椀の底部であるが，歪みがみられる。

第2表　土器観察表　　K（角閃石）　S（石英）　C（長石）　U（雲母）

挿図番号	遺物番号	出土区	層	器種	胎土	色調	器面調整 内	器面調整 外	焼成	備考
第12図	1	1 T	I	深鉢	K.S.C.U	暗赤褐色	粗いミガキ	粗いミガキ	良	不規則な沈線文？
	2	表採	一括	深鉢	K.S.C.U	明茶褐色	粗いミガキ	粗いミガキ	良	
	3	1 T	I	深鉢	K.S.C	赤褐色	粗いミガキ	粗いミガキ	良	
	4	1 T	I	深鉢	K.S.C	暗赤褐色	ハケナデ	ハケナデ	良	指つまみ突帯，外面スス付着
第13図	5	3－A	一括	深鉢	K.S.C	赤茶褐色	ナデ	条痕ナデ	良	波状口縁，凹線文
	6	1－B	I	深鉢	K.S.C.U	赤茶褐色	粗いミガキ	粗いミガキ	良	口唇部に沈線
	7	3－A	I	深鉢	K.S.C.U	淡黄褐色	条痕ナデ？	ナデ	良	凹線文＋刺突文
	8	4－A	一括	深鉢	K.S.C.U	淡黄褐色	条痕ナデ	ナデ	良	凹線文＋刺突文
	9	3－A	I	深鉢	K.S.C.U	茶褐色	ナデ	ナデ	良	刺突文
	10	3－A	I	深鉢	K.S.C	赤褐色	工具ナデ？	ナデ	良	くの字状口縁，凹線文＋刺突文
	11	3－B	一括	深鉢	K.S.C.U	淡茶褐色	ハケナデ	ハケナデ	良	爪形状刺突文
	12	2－A	一括	深鉢	K.S.C.U	淡赤褐色	ナデ	ナデ	良	
	13	2－A	一括	深鉢	K.S.C.U	茶褐色	粗いミガキ	ミガキ	良	断面三角形，黒曜石含む
	14	2－A	一括	深鉢	K.S.C.U	暗茶褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	良	
	15	2－A	I	深鉢	K.S.C	淡茶褐色	ミガキ	ミガキ	良	沈線文
	16	2－A	I	深鉢	K.S.C.U	赤褐色	ミガキ	ミガキ	良	沈線文
	17	2－A	I	浅鉢	K.S.C	赤褐色	粗いミガキ	粗いミガキ	良	
第14図	18	2－A	I	甕	K.S.C	暗赤褐色	ハケナデ	ハケナデ	良	指つまみ突帯
	19	4－A	I	甕	K.S.C	淡赤褐色	ナデ	粗いミガキ	良	指つまみ突帯＋爪形状刻み
	20	3－A	I	甕	K.S.C	淡黄褐色	不明	不明	不良	指つまみ突帯，内外面摩滅
	21	1－B	一括	甕	K.S.C	灰褐色	ハケナデ	工具ナデ	良	断列突帯
	22	I－B	I	甕	K.S.C	淡茶褐色	ハケナデ	ハケナデ	良	指つまみ突帯
	23	3－A	I	甕	K.S.C	淡赤褐色	不明	不明	不良	断列突帯，内外面摩滅
	24	2－A	I	甕	K.S.C	淡茶褐色	ハケナデ	ハケナデ	良	絡縄突帯，黒斑
第15図	25	3－A	I	甕	K.S.C	茶褐色	ハケナデ	ハケナデ	良	突帯，黒斑，内面粘土継目
	26	3－A	I	甕	K.S.C	茶褐色	ハケナデ	ハケナデ	良	断列突帯
	27	2－A	I	甕	K.S.C	淡黒茶色	工具ナデ	ハケナデ	良	断列突帯＋沈線，内外面粘土継目
	28	2－A	I	甕	K.S.C	淡茶褐色	ハケナデ	ハケナデ	良	指つまみ突帯＋爪形状刻み
	29	2－A	I	甕	K.S.C	淡茶褐色	ハケナデ	ハケナデ	良	指つまみ突帯，内外面粘土継目，黒斑
第16図	30	2－A	I	甕	K.S.C	淡赤褐色	ナデ	ナデ	良	指つまみ突帯，内外面やや摩滅
	31	4－A	I	甕	K.S.C	灰褐色	ハケナデ	不明	良	指つまみ突帯＋刻目，外面摩滅
	32	3－A	I	甕	K.S.C	暗赤褐色	ミガキ	ハケナデ	良	指つまみ突帯，外面やや摩滅
	33	2－A	I	甕	K.S.C	明赤褐色	工具ナデ	ハケナデ	良	断列突帯
	34	2－A	I	甕	K.S.C	淡灰褐色	工具ナデ	ハケナデ	良	断列突帯，内外面粘土継目
	35	2－A	I	甕	K.S.C	淡黄褐色	ハケナデ	ハケナデ	良	断列突帯
第17図	36	4－A	I	甕	K.S.C	明赤褐色	工具ナデ	ミガキ	良	指つまみ突帯，黒斑
	37	3－A	I	甕	K.S.C	淡赤褐色	ナデ	ミガキ	不良	断列突帯，外面スス付着
	38	2－A	I	甕	K.S.C	黒褐色	ハケナデ	ナデ	良	指つまみ突帯，外面摩滅
	39	4－A	I	甕	K.S.C	暗茶褐色	ハケナデ	ナデ	良	指つまみ突帯，外面摩滅
	40	3－A	I	甕	K.S.C	淡茶褐色	ハケナデ	ハケナデ	良	突帯
	41	3－A	I	甕	K.S.C	暗茶褐色	工具ナデ	ミガキ	良	突帯
	42	3－A	I	甕	K.S.C	明茶褐色	ハケナデ	ハケナデ	良	突帯
	43	3－A	I	甕	K.S.C	茶褐色	工具ナデ	ハケナデ	良	絡縄突帯
	44	4－A	I	甕	K.S.C	黄褐色	工具ナデ	工具ナデ	良	指つまみ突帯＋刻目，摩滅
第18図	45	2－A	I	甕	K.S.C	暗赤褐色	ナデ	ハケナデ	不良	刻目突帯，内外面やや摩滅
	46	2－A	I	甕	K.S.C	暗赤褐色	ナデ	ハケナデ	良	刻目突帯
	47	4－A	一括	甕	K.S.C	明茶褐色	ハケナデ	ハケナデ	良	指つまみ突帯＋爪形状刻み
	48	2－A	I	甕	K.S.C	暗赤褐色	ナデ	工具ナデ	良	指つまみ突帯，外面スス付着
	49	4－A	I	甕	K.S.C	黄褐色	ミガキ？	ハケナデ	良	絡縄突帯
	50	2－B	一括	甕	K.S.C	暗茶褐色	工具ナデ	ハケナデ	良	断列突帯

第3表　土器観察表　　K(角閃石)　S(石英)　C(長石)　U(雲母)

挿図番号	遺物番号	出土区	層	器種	胎土	色調	器面調整 内	器面調整 外	焼成	備考
第18図	51	3－A	一括	甕	K.S.C	淡黄褐色	ナデ	ハケナデ	良	断列突帯
	52	2－A	I	甕	K.S.C	黄白色	ハケナデ	ハケナデ	良	突帯
	53	1－B	I	甕	K.S.C	明茶褐色	ナデ	ハケナデ	良	突帯
	54	2－A	I	甕	K.S.C	暗茶褐色	ミガキ	ナデ	良	刻目突帯, 外面粘土継目
	55	4－A	I	甕	K.S.C	暗赤褐色	工具ナデ	ハケナデ	良	外面粘土継目
	56	3－A	I	甕	K.S.C	淡赤褐色	ハケナデ	粗いナデ	良	内面粘土継目
	57	3－AB	一括	甕	K.S.C	茶褐色	ハケナデ	ハケナデ	良	
	58	2－A	I	甕	K.S.C	淡赤褐色	ハケナデ	ハケナデ	良	内面粘土継目
	59	2－A	I	甕	K.S.C	灰褐色	工具ナデ	工具ナデ	良	器壁薄手, 外面やや摩滅
第19図	60	2－A	I	甕	K.S.C	明赤褐色	ハケナデ	ハケナデ	良	器壁薄手
	61	3－A	I	甕	K.S.C	淡赤褐色	ナデ	ハケナデ	良	突帯(縦位)＋竹管文
	62	3－A	I	甕	K.S.C	淡赤褐色	ナデ	ハケナデ	良	突帯(縦位)＋竹管文
	63	2－A	I	甕	K.S.C	明赤褐色	ミガキ	ミガキ	良	突帯＋竹管文, 黒斑, 粘土継目
	64	3－A	I	甕	K.S.C	茶褐色	ハケナデ	ハケナデ	良	突帯＋竹管文
	65	3－A	一括	甕	K.S.C	赤褐色	ハケナデ	ミガキ	良	突帯＋竹管文
第20図	66	2－A	I	壺	K.S.C	明赤褐色	ハケナデ	ミガキ	良	外面やや摩滅
	67	3－A	I	壺	K.S.C	明茶褐色	ミガキ	ミガキ	良	内外面摩滅
	68	3－A	I	壺	K.S.C	淡赤褐色	ハケナデ	ハケナデ	良	黒斑
	69	3－B	I	壺	K.S.C	明茶褐色	ナデ	ナデ	良	内外面摩滅
	70	1－A	一括	壺	K.S.C	茶褐色	ナデ	ハケナデ	良	
	71	2－A	一括	壺	K.S.C	茶褐色	ミガキ	工具ナデ	良	黒斑
	72	2－A	一括	壺	K.S.C	淡茶褐色	ハケナデ	工具ナデ	不良	
	73	4－A	I	壺	K.S.C	明赤褐色	工具ナデ？	粗いミガキ	良	外面摩滅
	74	2－A	I	壺	K.S.C	淡赤褐色	工具ナデ？	粗いミガキ	良	
	75	3－A	I	壺	K.S.C	明茶褐色	ハケナデ	ハケナデ	良	指頭痕？
	76	3－A	一括	壺	K.S.C	暗赤褐色	ミガキ	ハケナデ	良	外面やや摩滅
	77	3－B	一括	壺	K.S.C	茶褐色	ミガキ	ハケナデ？	不良	外面やや摩滅
	78	2－A	I	壺	K.S.C	淡黄褐色	ハケナデ	ハケナデ？	良	外面摩滅
	79	2－A	I	壺	K.S.C	暗赤褐色	ミガキ	工具ナデ？	良	黒斑, 粘土つぶ付着
	80	2－A	I	壺	K.S.C	明茶褐色	ハケナデ	ミガキ	良	指つまみ突帯＋刻目, 黒斑
第21図	81	3－A	I	鉢形	K.S.C	明赤褐色	ハケナデ	粗いミガキ	良	絡縄突帯
	82	3－B	I	鉢形	K.S.C	茶褐色	ハケナデ	ハケナデ？	良	突帯, 内面摩滅
	83	3－B	I	高坏形	K.S.C	暗赤褐色	ハケナデ	粗いミガキ	良	断列突帯, 内面摩滅
	84	3－B	I	高坏形	K.S.C	暗赤褐色	ハケナデ	粗いミガキ	良	断列突帯, 内面摩滅
	85	2－A	I	高坏形	K.S.C	暗茶褐色	ハケナデ	工具ケズリ？	良	
第22図	86	2－A	I	高坏形	K.S.C	明赤褐色	ミガキ	ミガキ	良	外面丹塗り, 黒斑
	87	3－A	I	鉢形？	K.S.C	暗茶褐色	ハケナデ	ハケナデ	良	底部内面天井が下方へさがる
	88	4－A	I	鉢形？	K.S.C.U	暗赤褐色	ナデ	ハケナデ	良	金雲母を多量に含む
	89	3－A	I	高坏形	K.S.C	明赤褐色	ミガキ	ミガキ	良	底部外面天井工具ナデ
	90	3－A	I	高坏形	K.S.C	暗茶褐色	ミガキ	ミガキ	良	底部外面天井工具ナデ
	91	1－B	I	小型鉢	K.S.C	淡赤褐色	回転ケズリ	回転ケズリ？	良	摩滅
	92	2－B	I	小型鉢	K.S.C	淡茶褐色	回転ケズリ	不明	良	摩滅, 黒斑
	93	3－A	I	小型鉢？	K.S.C	茶褐色	ミガキ	ミガキ	良	
	94	2－B	一括	小型鉢	K.S.C	明赤褐色	ミガキ	ミガキ	良	
	95	3－A	I	椀	K.S.C	淡茶褐色	ハケナデ	工具ナデ？	良	不規則な線刻, 摩滅, 黒斑
第23図	96	1－B	I	甕	K.S.C	暗茶褐色	工具ナデ	ハケナデ	良	内面粘土継目, 外面凹凸, 木葉底
	97	1－B	I	甕	K.S.C	暗茶褐色	工具ナデ	ハケナデ	良	内面粘土継目, 外面凹凸, 木葉底
第24図	98	1－B	I	甕	K.S.C	暗茶褐色	工具ナデ	ハケナデ	良	内面粘土継目, 外面凹凸, 粘土つぶ付着
	99	4－A	I	甕	K.S.C	明赤褐色	ハケナデ	工具ナデ	良	木葉底
	100	2－A	I	甕	K.S.C	明茶褐色	ミガキ	ハケナデ	良	底部中央に窪みあり

第4表　土器観察表　　K（角閃石）　S（石英）　C（長石）　U（雲母）

挿図番号	遺物番号	出土区	層	器種	胎土	色調	器面調整 内	器面調整 外	焼成	備考
第24図	101	3－A	一括	甕	K.S.C	明茶褐色	工具ナデ	ミガキ	良	底部凹凸あり
	102	1－B	I	甕	K.S.C	明茶褐色	ハケナデ	工具ナデ	良	木葉底, 黒斑
	103	4－A	I	甕	K.S.C	茶褐色	工具ナデ	ミガキ	良	木葉底？
	104	3－B	I	甕	K.S.C	暗茶褐色	ミガキ	ナデ	良	黒斑？
	105	2－B	I	甕	K.S.C	明茶褐色	ハケナデ	ナデ	不良	木葉底, 摩滅
	106	3－B	I	甕	K.S.C	明茶褐色	ナデ	ナデ	不良	木葉底, 摩滅
	107	1－B	I	甕	K.S.C	明赤褐色	ハケナデ	ハケナデ	良	木葉底, 黒斑
	108	2－A	I	甕	K.S.C	明赤褐色	ハケナデ	ナデ	良	貝殻条痕文？, 黒斑, 摩滅
第25図	109	2－A	I	甕	K.S.C	明赤褐色	ハケナデ	ハケナデ	良	木葉底
	110	3－A	I	甕	K.S.C	暗茶褐色	工具ナデ	粗いミガキ	良	木葉痕＋格子状線刻あり
	111	2－B	I	甕	K.S.C	明茶褐色	ミガキ	工具ケズリ？	良	木葉底
	112	3－A	I	甕	K.S.C	明茶褐色	工具ナデ	ハケナデ	不良	木葉底
	113	4－A	I	甕	K.S.C	暗茶褐色	工具ナデ	ミガキ	良	底部側面線刻あり, 内底工具痕あり
第26図	114	3－B	I	杯蓋	S	暗青灰色	回転ナデ, 静止ナデ	回転ナデ	良	付着物あり, 小礫含む
	115	3－B	I	杯蓋	S.C	暗青灰色	回転ナデ, 静止ナデ	回転ナデ, 静止ナデ	良	小礫含む
	116	3－A	I	杯蓋	C	明青灰色	回転ナデ, 静止ナデ	回転ナデ	良	堅緻, 小礫含む
	117	2－B	I	杯蓋	K.S.C	暗灰色	回転ナデ, 静止ナデ	回転ナデ, ケズリ	良	小礫含む, 外面回転ヘラケズリ
	118	3－B	I	杯蓋	K.S.C	明青白色	回転ナデ, 静止ナデ	回転ナデ, ケズリ	良	外面回転ヘラケズリ, 小礫含む
	119	2－A	I	杯蓋	S.C	暗青白色	回転ナデ, 静止ナデ	回転ナデ, ケズリ	不良	小礫含む, 粘土つぶ付着, 外面回転ヘラケズリ
	120	1－B	I	杯蓋		明青灰色	回転ナデ	回転ナデ, ケズリ	良	堅緻, 外面回転ヘラケズリ, 小礫含む
	121	1－B	I	杯蓋		明青白色	回転ナデ, 静止ナデ	回転ナデ, ケズリ	良	堅緻, 回転ヘラケズリ, 内面にヘラ記号
	122	2－A	I	杯蓋	C	暗灰色	回転ナデ, 静止ナデ	回転ナデ	良	小礫含む
	123	3－A	I	杯蓋	S	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	良	小礫含む
	124	3－A	I	杯身	S	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ, 静止ナデ	良	小礫含む
	125	2－B	I	杯身	S.C	明青白色	回転ナデ, 静止ナデ	回転ナデ	良	小礫含む
	126	1－B	一括	杯身	S.C	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	良	小礫多量含む
	127	4－A	I	杯身	S.C	明青灰色	回転ナデ, 静止ナデ	回転ナデ	良	底部回転ヘラケズリ, 小礫多量含む
	128	1－B	I	杯身	K.S.C	暗茶灰色	回転ナデ	回転ナデ	不良	やや摩滅, 小礫含む
	129	3－A	I	杯身	S.C	暗灰色	回転ナデ, 静止ナデ	回転ナデ, ケズリ	良	底部回転ヘラ切り離し, 小礫含む
	130	2－A	I	杯身	C	淡黄灰色	回転ナデ	回転ナデ	不良	小礫含む, 粘土つぶ付着
	131	3－A	I	杯身	S.C	暗灰色	回転ナデ, 静止ナデ	回転ナデ	良	小礫多量含む
	132	2－A	I	杯身	C	明青灰色	回転ナデ, 静止ナデ	回転ナデ	良	小礫多量含む
	133	1－B	一括	杯身	K.S	赤褐色	回転ナデ, 静止ナデ	回転ナデ	不良	小礫含む
	134	2－B	一括	杯身	K.S.C	淡茶灰色	回転ナデ, 静止ナデ	回転ナデ	良	小礫含む
第27図	135	4－A	I	高坏	S.C	淡茶白色	回転ナデ	回転ナデ, 静止ナデ	良	小礫多量含む
	136	2－B	I	甕	C	淡灰白色	回転ナデ	回転ナデ	良	摩滅
	137	1－B	I	椀	K.S.C	灰白色	不明	不明	良	摩滅, 小礫含む
	138	2－A	I	皿	K.S.C	灰白色	回転ナデ, 静止ナデ	回転ナデ	良	摩滅, 小礫含む
	139	3－A	I	皿	C	淡赤褐色	不明	不明	良	摩滅, 小礫含む, 線刻あり
	140	3－A	I	椀	K.S.C	淡灰白色	不明	ハケナデ	良	やや摩滅, 小礫含む

第 Ⅳ 章 まとめにかえて

1.遺構について

本遺跡から出土した遺構は，3基の竪穴状遺構であり，住居跡であると確認するには至らなかった。また，いずれの遺構も時期を限定することのできる火山灰を含まず，埋土中の遺物も攪乱によるものか，古代から近代にかけての細片遺物であった。

2.出土遺物について

本遺跡の出土遺物は，いわゆる「成川式土器」の中で，最も新しい段階のものが主体を占める。また，須恵器も出土していることから，本来は，「成川式土器」の下限を検討できる遺跡になり得たであろう。

しかしながら，今回の発掘調査地点における土層の堆積状況が良くないため，出土遺物のすべてが攪乱層からの検出であり，資料的価値は決して高いものではない。

いわゆる「成川式土器」の甕形土器における口縁部形状の系譜としては，口縁部が「く」字状に外反するものから直行し，内湾するものへと移行するようである。(1)**甕形土器**は，やや外反するものも存在するが，屈曲部内面に明確な稜線をもつものは存在せず，直行ないし，内湾するものが主体を占める。このため，中村直子氏の辻堂原式，笹貫式で[注1]，多々良友博氏のⅥ，Ⅶ期相当[注2]と捉えたい。

また，④**その他**として取り扱った突帯上に竹管文を施す土器は，「成川式土器」の文様構成に竹管文がみられることから，ここに包括した。しかしながら，突帯を縦位に施すものは疑問が残る。

(8)**甕形土器**は，本遺跡出土のいわゆる「成川式土器」の甕形土器とは異なる点がある。その相違点を列挙すると，①張りをもたない胴部は，長胴化の傾向が窺えること。②やや上げ底の底部は存在するが，主体を占める底部は平底であること。③木葉底が多くみられること。以上挙げた相違点から「成川式土器」ではない可能性が高い。

木葉底を有する甕形土器は，宮崎県下において，ある程度普遍的にみられるようである[注3]。本遺跡の甕形土器は，宮崎市浄土江遺跡出土土器に類似すると考えられる。

浄土江遺跡の甕形土器は，Ⅰ～Ⅲ式に分類されている[注4]。本遺跡の甕形土器とほぼ同時期と考えられるⅠ式，Ⅱ式の口縁部形状を比較すると，特に大きな変化はみられない。

しかしながら，胴部・底部・外面調整については，次のような傾向がみられるようである。Ⅰ式は胴部が膨み，底部は丸底となり，外面調整はタタキ技法・擦痕・刷毛を主流とするが，Ⅱ式は胴部が長胴化し，底部は平底となり，外面調整はヘラナデ・ヘラケズリ技法が主体となる[注5]。この傾向を踏まえると，本遺跡の甕形土器は，Ⅱ式の形態上の特徴に合致しているようである。しかしながら，Ⅱ式の特徴の一つである器壁外面調整のヘラナデ・ヘラケズリ技法はみられず，胎土にも違いがみられるようである。

つまり，本遺跡の甕形土器は，形態上は浄土江遺跡Ⅱ式に類似するが，外面調整の技法・胎土については，在地系の「成川式土器」と似ていることから，7世紀代として捉えてたい。

(10)**須恵器**は，坏蓋・坏身・高坏・甕である。坏蓋は返りを有するもの，返りがなく，玉縁状・喙状口縁となるもの，体部より外側に開くものが存在する。坏身は，蓋受けを有するもの，有しないものがみられる。以上のことから，やや時期の下るものも存在するが，7～8世紀代を中心とするものとして考えたい。鹿児島県における須恵器の生産は，薩摩国では8世紀中頃で，大隅国では8世紀後半頃とされている[注6]。このことを踏まえると，本遺跡出土の須恵器は搬入品ということであろう。

本町において，いわゆる「成川式土器」が出土する遺跡は多いとはいえない。また，宮崎県との関係を示唆する資料として，木葉底を有する甕形土器も出土した。

今回の発掘調査の結果，宮脇遺跡は縄文遺跡としてのみでなく，志布志では希有な出土例を有する古墳時代～平安時代の複合遺跡であり，今後の調査に大きく寄与するものと考えられる。

（引用文献）
注１　多々良友博「成川式土器の検討」『鹿児島考古』15 鹿児島県考古学会　1981
注２　中村直子　「成川式土器再考」『鹿大考古』６　鹿児島大学考古研究室　1987
注３　池畑耕一氏御教示による。
注４　野間重孝　「浄土江遺跡における土師式土器の編年的試論」宮崎考古学会　1981
注５　注４に同じ。
注６　中村和美　「鹿児島県（薩摩・大隅国）における平安時代の土器」日本中世土器研究会　1994

（参考文献）
鹿児島県教育委員会　『榎木原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財報告書（44）　1987
鹿児島県教育委員会　『保養院遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
発掘調査報告書11　1994
垂水市教育委員会　『後ヶ迫Ａ遺跡』垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書（3）　1999
久留米市教育委員会　『旗原遺跡』久留米市文化財調査報告書　第171集　2001
志布志町教育委員会　『志布志の埋蔵文化財』　1985
志布志町教育委員会　『中原遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（９）　1985

写 真 図 版

図版1

A地点 作業風景(東より)

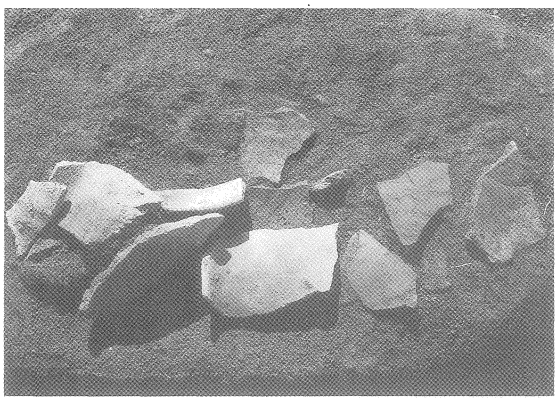
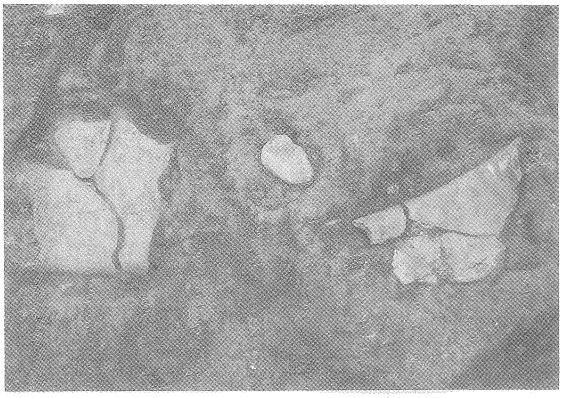
A地点 作業風景(南より)

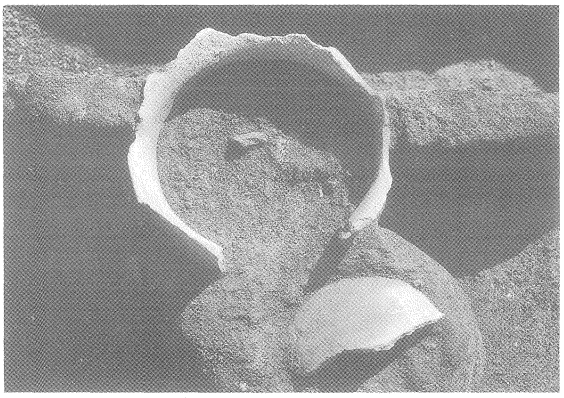
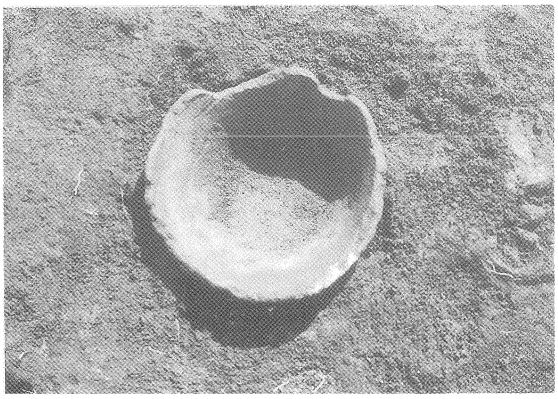
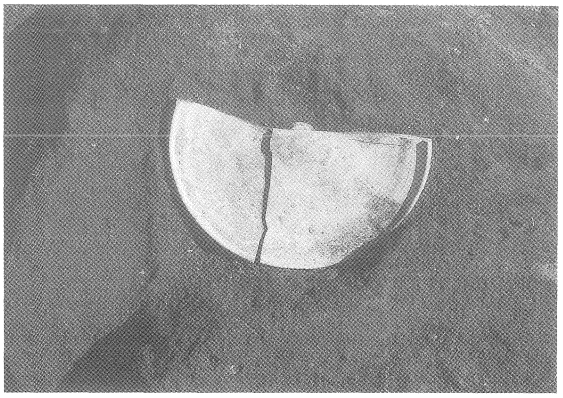
遺物検出状況

遺物集中箇所

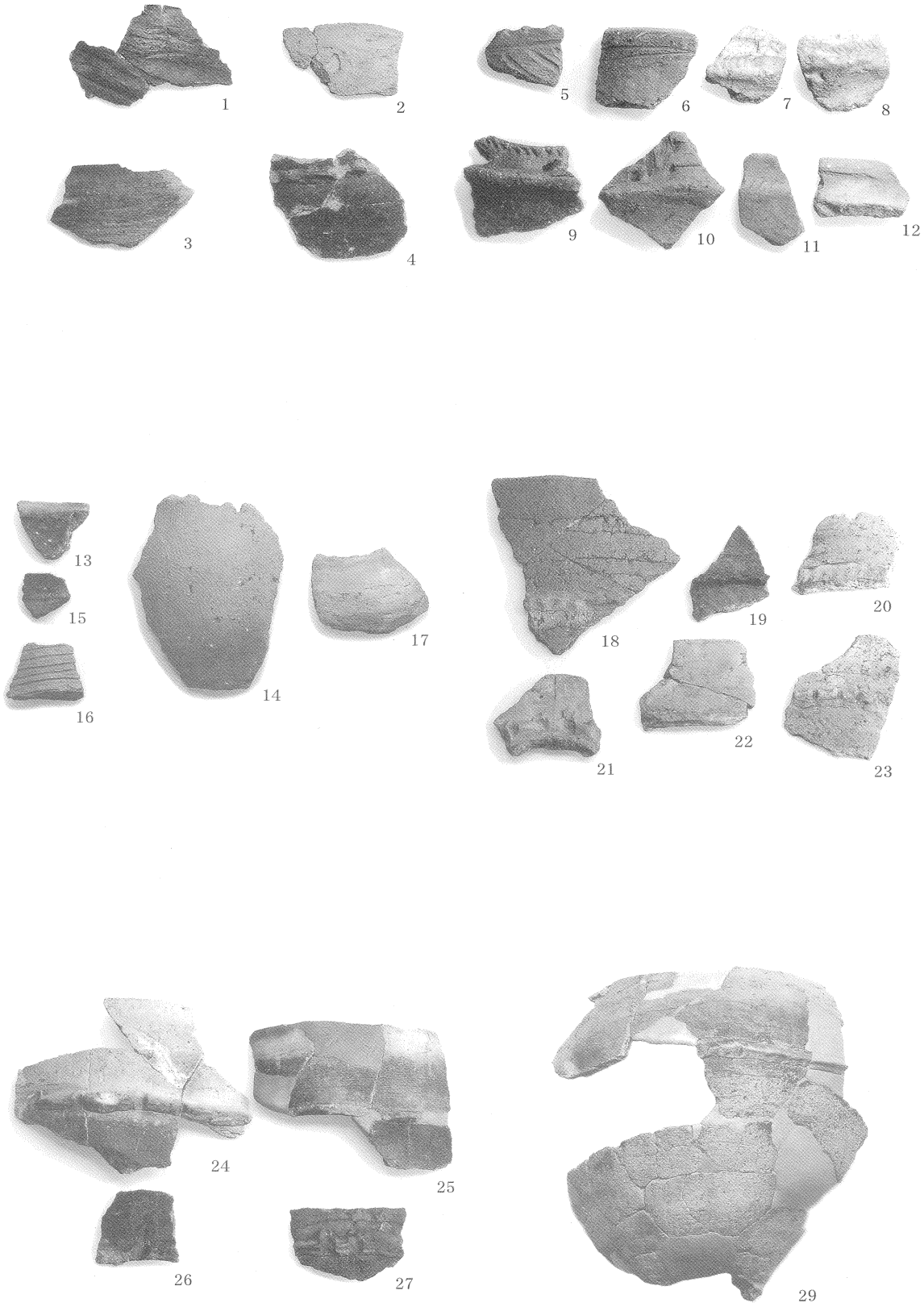
完掘状況(西より)

調査終了

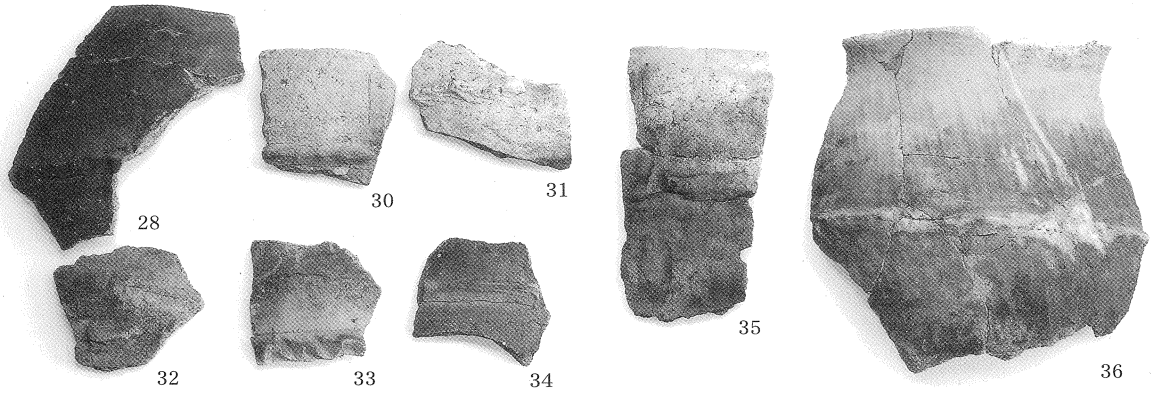



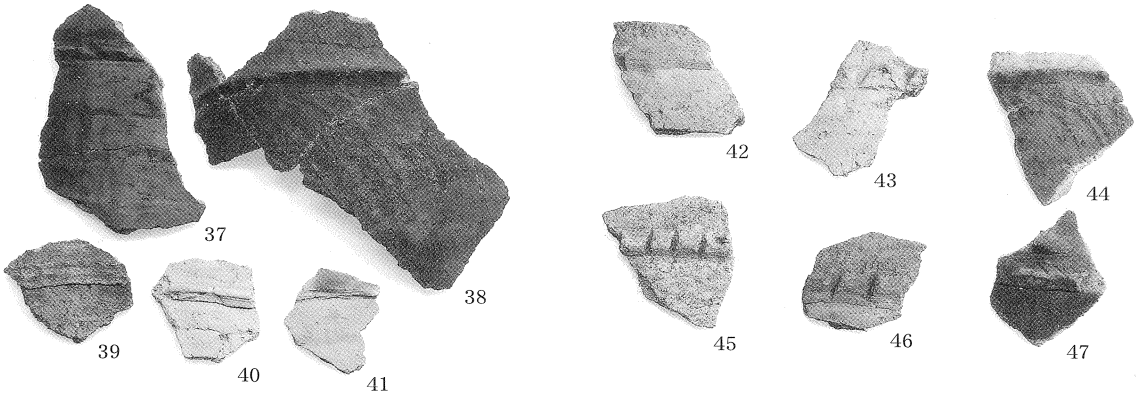




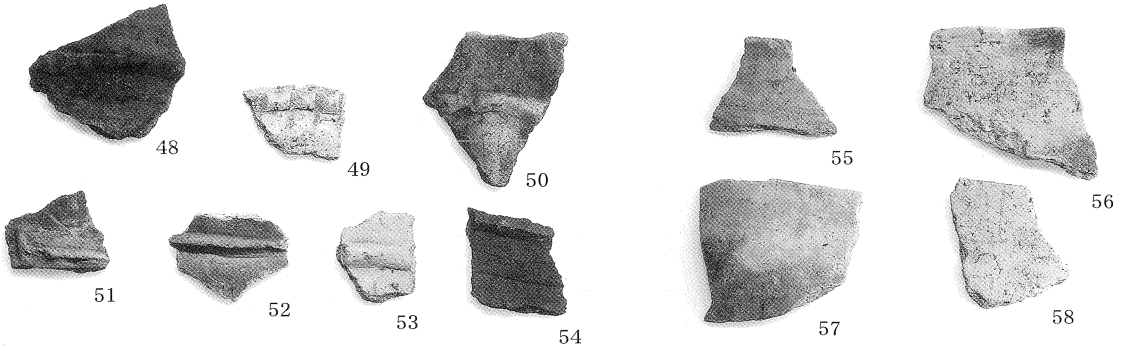
遺物出土状況



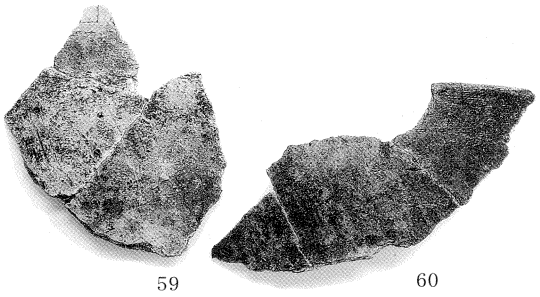
出土遺物(1)


28
30
31
32
33
34
35
36


37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47


48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58

出土遺物(2)


59

60

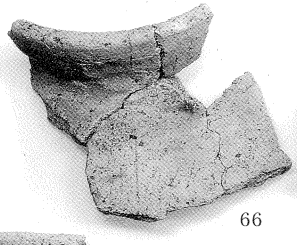
61

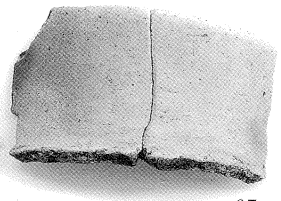
62

63

64

65


66


67

72

73

74

76

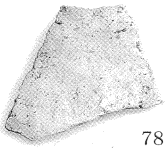
68

69

70

71

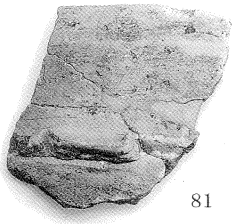
75


78

77

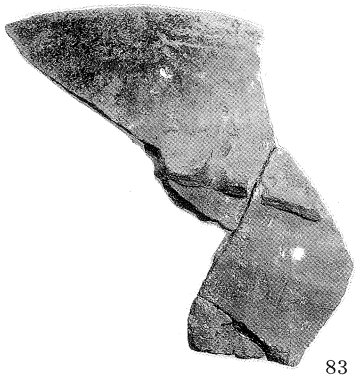
79

80


81

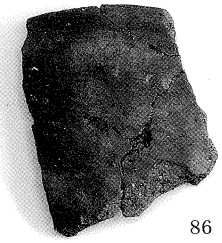
82

出土遺物(3)


83

84

85


86

87

88

89

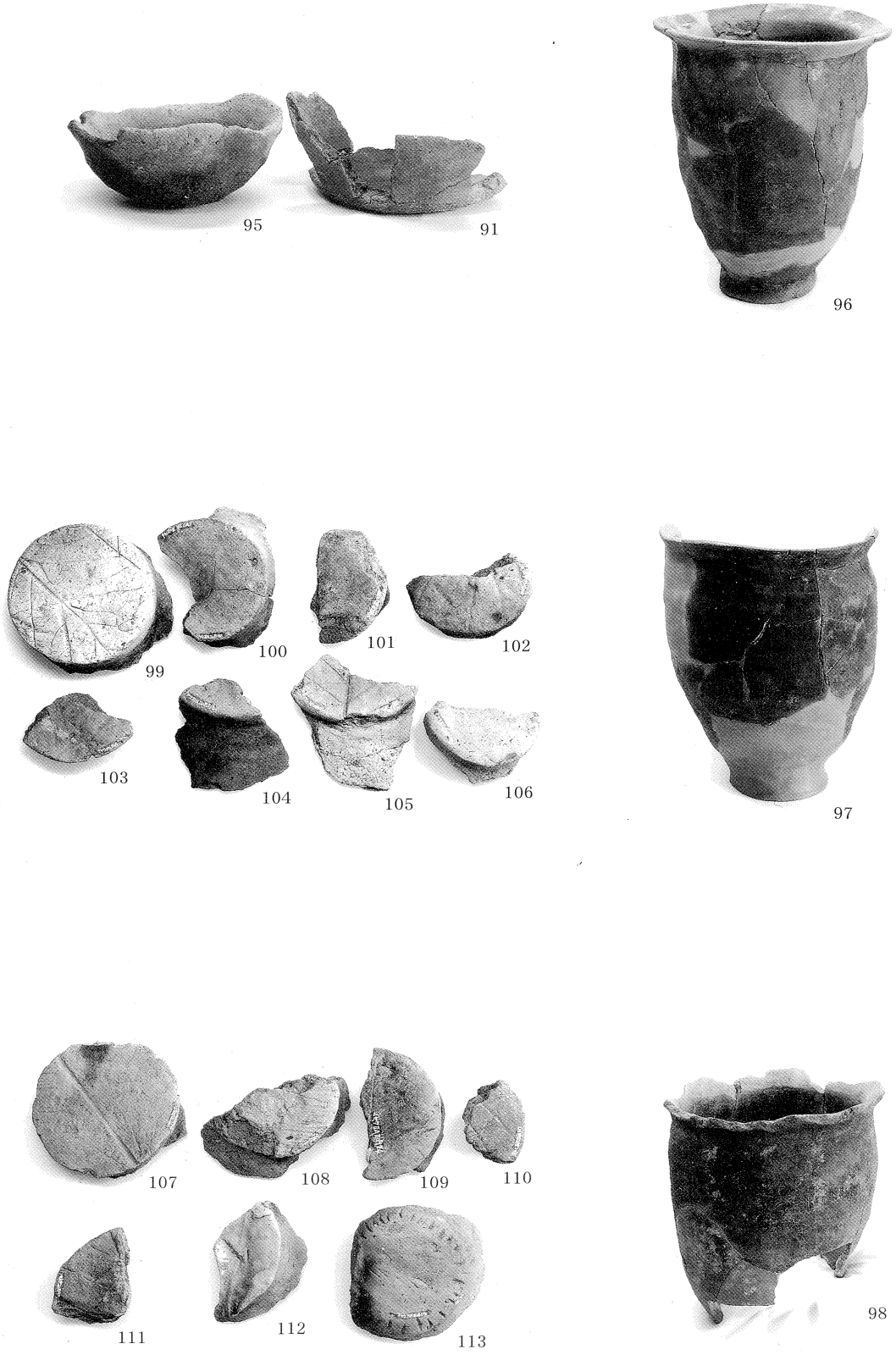
90

92

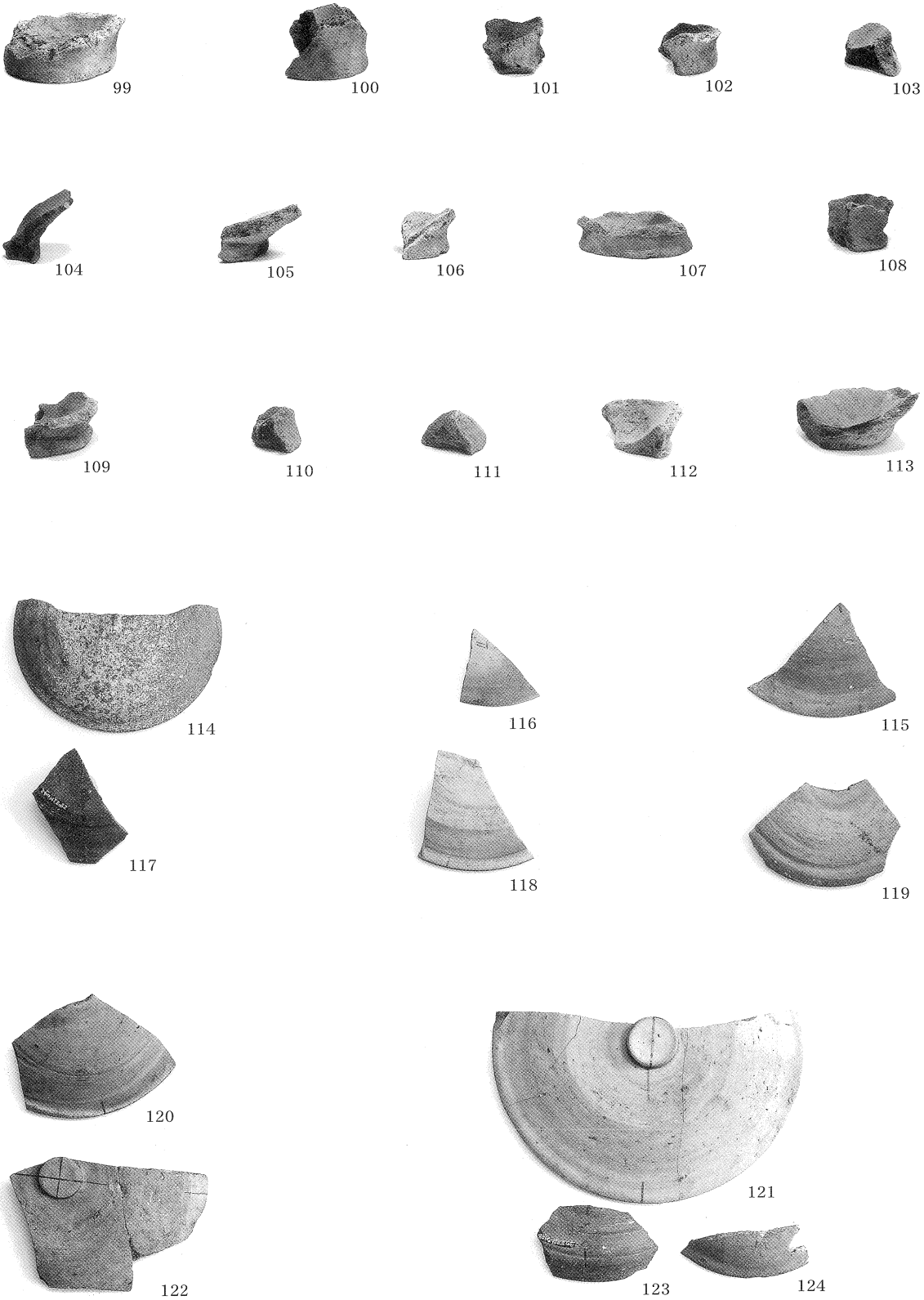
93

94

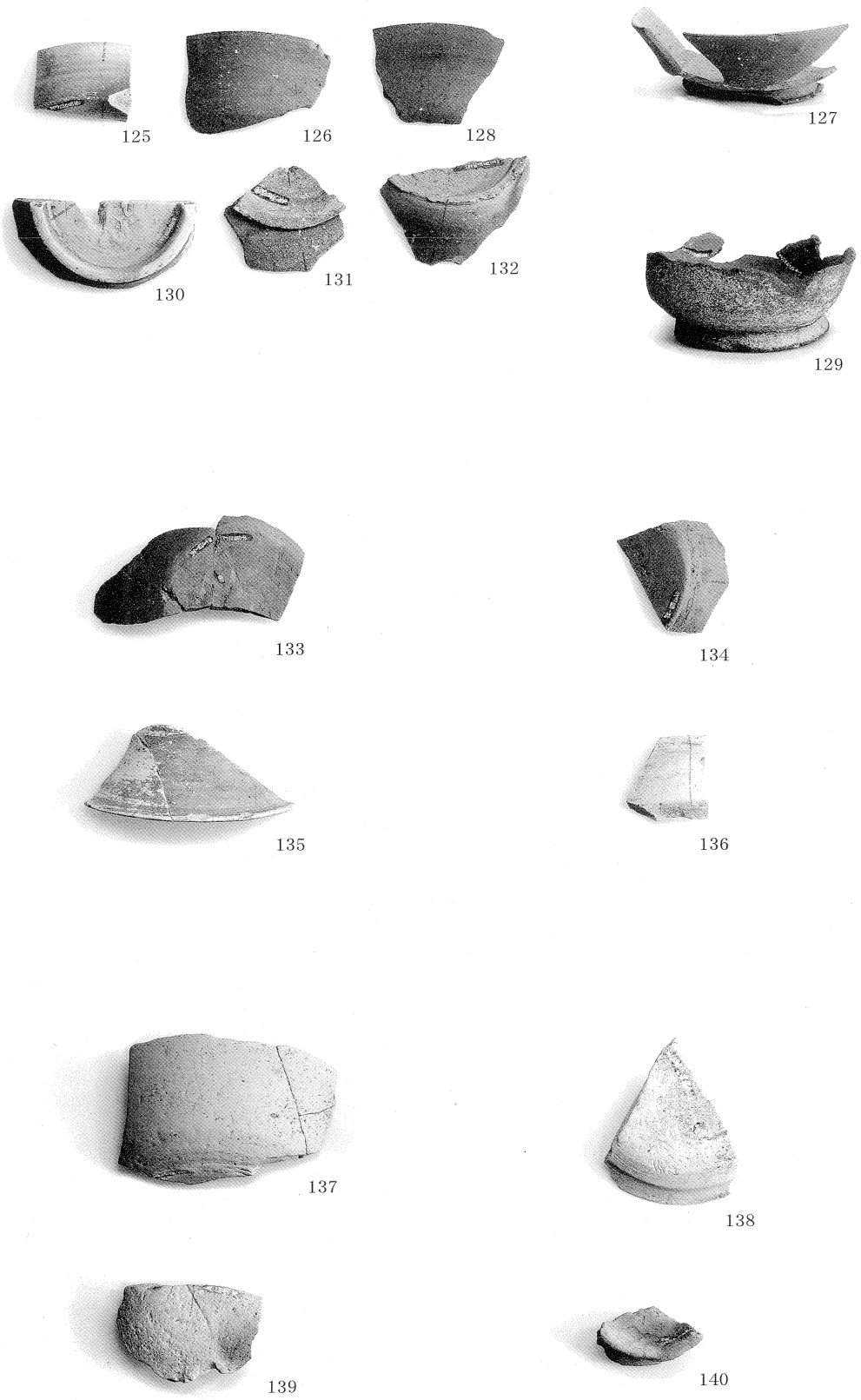
出土遺物(4)


95
91
96
99
100
101
102
103
104
105
106
97
107
108
109
110
111
112
113
98

出土遺物(5)


99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
116
115
117
118
119
120
121
122
123
124

出土遺物(6)



出土遺物(7)

あ と が き

宮脇遺跡の調査報告書もようやく刊行にこぎつけた。

寒風吹きすさぶ発掘調査現場において、小雪が舞う中での発掘作業は、特に印象に残っている。また、現場事務所が自宅から数百米の場所にあり、集落の方々との心のふれあいがあり、感慨深い現場でもあった。

発掘調査・報告書作成にあたっては、できる限り詳細な記録を残すことに心がけたが、不備を承知のうえで、報告しなければならないことは、心苦しい限りである。今後、機会をみて不備を修正し、その責務を全うしたいと考えている。

本報告書を作成するにあたり、多くの方々に御協力、御教示をいただいた。特に、突然の訪問にもかかわらず、懇切丁寧に御協力、御教示いただいた宮崎県新富町教育委員会の有馬義人、松永幸寿両氏並びに宮崎県埋蔵文化財センター職員の皆様方には感謝申し上げる次第であります。

〈御指導・御協力いただいた方々〉

有馬義人・池畑耕一・大窪祥晃・白木守・成尾英仁・松永幸寿・宮崎県立埋蔵文化財センター職員

〈発掘作業員〉

西川末広・春口峯次・山村又男・山村照男・五代正巳・春口稔・山裾忍・又木哲朗・児玉明・春口繁・田之上安民・水流トシ子・馬場厚子・坪田和子・下山エル・早瀬久子・田之上鈴子・森川チドリ・片村光子・春口ノリ子・浜田まさ子・柴　洋子・牛倉セツ子・肝付羨子・園田テル・検崎ハツ子・竹之内カズ子・森村イチ子・岩田スズエ・生重美恵子・安楽えつ子・上杉みゆき・岩切節子・樽野次子・北村広子・見野三千子・木上美樹子・松清正子

〈整理作業員〉

生重美恵子・安楽えつ子・上杉みゆき・岩切節子・樽野次子・北村広子・見野三千子・木上美樹子・松清正子

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(28)

宮　脇　遺　跡

発行日　平成13年3月

発　行　志布志町教育委員会(鹿児島県曽於郡志布志町志布志二丁目1番1号)

印刷所　志布志印刷有限会社(鹿児島県曽於郡志布志町安楽1966-2)